翻刻『源氏物語古註』（三十九）――夕霧――

（山口県文書館蔵　右田毛利家伝来細川幽斎自筆本）

熊本守雄
Morio KUMAMOTO

凡例

一、本稿は、山口県文書館蔵の右田毛利家伝来、細川幽斎自筆『源氏物語古註』（仮称。あるいは『源氏物語抄』と称すべきか。天理図書館ならびに京都大学に分蔵されている菊亭家旧蔵本では『源氏物語抄』とある。細川幽斎が慶長五年当時在住せし丹後田辺城を石田三成により攻囲せられた際に、智仁親王の許に献呈しようとした書の中に見えている『源氏物語抄』が、この右田毛利家伝来本であるかもしれない）の「夕霧」一帖を翻刻したものである。

二、「夕霧」一帖は、五括より成る。即ち、料紙を何枚か重ねて二つ折にした括りが、全部で五括りある。

第一括　料紙四枚八葉（その内、端一丁は前表紙の見返しとして使われており、墨付は七丁）

第二括　料紙七枚十四葉

第三括　料紙六枚十二葉

第四括　料紙七枚十四葉

第五括　料紙五枚十葉（その内、端一丁は後表紙の見返しとして使われており、その見返しにも墨付があり、墨付は十丁）

料紙五十八葉の内、墨付は五十七丁、百十三面に及んでいる。

三、「夕霧」一帖の翻字にあたっては、できるだけ原本に添いながらも、次の諸点において、一部手を加えた。

1　注釈の項目（見出しの本文）即ち、源氏物語の本文には、読解の便を考えて、「　」を付し、示した。

2　原本にはないが、読みやすくすることを目的として、注釈の本文に、仮に、句読点を施し、又、私意により、濁点表記を加えた。

3　原本の本文丁数（墨付丁数）を示すため、各面の終わりに〈1オ〉〈1ウ〉〈2オ〉〈2ウ〉などの記号をつけた。

4　原本では、注釈の本文の各項毎に（その冒頭に）、「一、」を記して、注釈を加えることを普通とするが、ま、改行して項目を立てながらも、「一、」のない場合がある。そうした項目の場合には、㈠と、かっこを付して示した。

5　現行の活字の範囲内で、可能な限り、原本の字体を再現する努

力はしたが、異体文字・変体仮名は現行の活字の字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原本の通りである。

6　本書に疑問のある箇所及びミスプリントと誤認されやすい箇所等には、（マヽ）と記した。

○　資料の翻刻を許可していただいた山口県文書館に感謝申し上げます。

「夕ぎり」、哥をもて、まきのなとす。源氏五十歳八月より冬まで。
一、「まめ人の名をとりてさかしがり給ふ大将」とハ、夕ぎり、実めなる人といはれ、かしこだてし給しも、一条の女二の宮に心とゞめ給て、大かたの人めにハ、かしハ木のゆいごんをわすれぬよういにみせつゝ、いとねんごろにとぶらひ給ふ。「ようい」、心もち也。用意也。
一、「かくてハやむまじ」とハ、たゞ大かたにてハやむまじ、夫婦の契約せんと月日にそへて思ひまさり給ふ也。
一、「宮所も」（マヽ、「す」脱）とは、女二の宮の御母ミやす所も、あハれにありがたき夕ぎりの御心ばへ、かしハ木のゆいごんわすれ給ハぬと、いよ〳〵宮のうち物さびしき御つれ〴〵を、なぐさめ給ふ事もおほかり。
一、はじめより夕ぎりけさうびてもきこえ給ハざりしに、ひきかへしなまめかんもまばゆし、たゞふかき心ざしをみせ奉りて、女二の宮〈1オ〉うちとけ給ふもおりもあらじやハ、とさるべき事につけても、女二の宮の御けハひ見給ふ。
一、「ミづから」とハ、女二の宮ミづから物の給ふ事などハさらになき也。
一、いかなるつゐでに、おもふ事をもまほにいひしらせ奉りて、人の御けハひをもみん、と夕ぎりおぼしわたる也。
一、御息所、物のけにわづらひ給て、をのといふわたりに、山里も給へるにわたり給へり。はやうより御いのりの師にて、物のけはらひすてけるりつしの、山ごもりして、里にいでじとちかひたるを、ふもとちかくて、さうじおろし給ふゆへに、をのにミやす所わたり給ふ也。是ハ、恵心の僧都、安養の尼所労の時さがり松といふ所におり給て、たいめんありし事をひきかへてかける、と也。
一、「御車よりはじめて」とハ、宮す所のり給ふべき車など、夕ぎりとゝのへま〈1ウ〉いらせ給へる也。「中〳〵まことのむかしのちかきゆかり」とハ、かしは木の御はらからのきんだちハ、ことわざしげきいとなミにまぎれ、女二の宮の御ことを思ひいで給ハぬ也。「弁のきミ」とハ、弁の少将ハ、おもふ心ありて、けさうし給しに、ことのほかに女の宮もてなし給けるに、しゐてもとぶらひ給ハで、うと〳〵しくなり給たる也。
一、「このきミハ」とは、夕ぎりハ、かしこう、さりげなくていひよりなれ給へる也。「さりげなく」とは、けさう心なげに、女二の宮に、夕ぎりいひより給へる也。
一、ずほうなど宮す所し給ふ、と夕ぎりきゝ給て、僧のふせ、浄衣などこまやかなる物どもさへまいらせ給ふ也。「浄衣」とハ、かぢのそうのき給ふさうぞく也。
一、「なやミ給ふ人ハ」とは、宮所（マヽ、「す」脱）ハ、かへしし給ハねば、女二の宮かへりごとかき給し也。「せんじがき」とハ、右筆にかゝする事也。「いとおかしげにて」とハ、女二の〈2オ〉宮の御てたゞ一くだりばかり、おほどかなるかきざまも、ことばも、なつかしき也。「いよ〳〵ミまほしう」とハ、夕ぎり、女二の宮の御てみまほしと夕ぎりおぼす也。
一、「あるやう」とハ、くもゐのかり、女二の宮の御かたへしげき御文かよハしはたゞならじと、夕ぎりをうたがひ給ふ也。
一、「まうでまほしう」とハ、夕ぎり、をのにまうでんとおぼせど、とみにハいでたち給ハず。「やま里のありさま」とハ、をのゝありさま、ゆかしく夕ぎりおぼさるゝ也。
一、「なにがしりつしの」とハ、をのにりつしめづらしくおりたるに、せちにかたらひたき事あり。宮す所のわづらひ給なるもとぶらひがてら、まうでんと、大かたにいひて、夕ぎりいでたち給ふ也。御ぜんの人〻も、かりぎぬにておハします也。「松がさきのお山」、ひらの山ふもと也。氷室の在所也。をのといふ所、山城のうちに二所あ

り。これハ、愛宕の郡也。〈2ウ〉

一、「さる岩ほならねど」ゝハ、秋の色あるべきいはほならねど、つたくずのはなどの色にて、秋ふかくミゆる、と也。「家ゐに」とは、庭にうつしたる野山のけうよりも、をのづからけしきまさりたる也。

一、「はかき柴がき」とは、をのゝすまひのさま也。かりそめになれど、「あてに」とは、けだかく、すミなし給へる也。

一、「ずほうのだんぬりて」とハ、護摩のだんぬりたる也。きたおもてに、ミやす所おハす。にしおもてに、女二の宮すミ給へる也。

一、「御物のけむつかし」とハ、女二の宮に、物のけうつりやせんと、京にとゞめをき奉り給へども、たちはなれ奉らじと、したひてわたり給たる也。

一、「人にうつりちる」とは、物のけの人にうつるゆへに、すこしのへだてに、女二の宮にしおもてにわたし奉り給へる也。

一、「まらうどのゐ給ふべき所のなければ」とハ、夕ぎりのおハしますべき〈3オ〉所のなければ、女二の宮の御かたのみすのまへにいれ奉りて、上らうだつ女ばう、御せうそこきこえつたふ。いとかたじけなく、かうまでの給ハせわたらせ給へるを、もしかひなくなりはて侍りなば、夕ぎりのかくおハしましたる、かしこまりをだにたいめんに聞えさせぬ、とミやす所の給ふ也。「いましバしかけとゞめまほしき」とハ、いますこしいのちありて、夕ぎりに此かしこまりの給ひたき、と宮す所の給ふ也。

一、「わたらせ給し御をくりにも」とは、御息所、をのへわたり給ふ御をくりにも、まいらんを、六条院にうけ給ハりさしたる事侍しほどにて、日ごろも、うと〳〵しきやうになり侍し心のほどよりハ、をろかにや、などゝ夕ぎりの給ふ也。「宮は、おくのかたに」とハ、女二の宮ハ、いとしのびておハします。たゞ所の、ことぐ〳〵しからぬしつらひ、あさきやうなれバ、夕ぎり、女二のミやの御けハひきゝ給ふ也。うちミじろき給ふ御ぞのをとなひ、〈3ウ〉さばかりなり、ときゝゐ給へる也。「あなたの御せうそこかよふ」とハ、宮す所にせうそこつたへ給ふひまに、少将のきミなどに物語し給て、かうまいりなれぬる事の、としごろといふばかりなるに、物とをうもてなさせ給へるうらめしさなん。かゝるミすのまへにて、人づての御せうそこ、ほのかに聞えつたふる事よ。まだかやうにハならひ侍らぬ、との給ふ也。

一、「いかにふるめかしき」とは、としよりと、人〻もわらひ給ふらん、とはしたなくなん。よハひつもらずかるらかなりしほどに、すきぐ〳〵しき事おもなれなましかば、かくうゐ〳〵しくハ侍らざらまし、と夕ぎりの給ふ也。

一、「かばかりすく〳〵しう」とハ、すくミたる心のやうに、おれて女二の宮の御心にしたがふ人ハ、たぐひあらじ、と夕ぎりの給ふ也。人におれしたがふ事也。又、女二の宮おハれ給ハで、すく〳〵しうおハしますともいへる也。此時は、おれでと、てもじにごる也。雅をおり給ハぬ也。〈4オ〉

一、げにいとあなづりにくきさまのし給へれば、中〳〵御いらへきこえいでんハ、はづかしうなど、つきしろひて、かゝる御うれへ、きこしめししらぬやうなりと、女二の宮に人〻きこゆ。

一、「ミづから聞え給ハぬ」とハ、宮す所のたいめんなきに、かハり侍るべきを、をそろしきまで御息所わづらひ給ふを、見あつかひ侍しに、いとゞあるかなきかになりて、え聞えさせぬ。女二の宮の給ひいたしたる也。

一、「こハ、宮の」とハ、これは、女二の宮の御せうそことて、夕ぎりゐなをり給へる也。心ぐるしき御なやミを、身にかふばかりなげき侍るも、なにゆへにか。かたじなけれ、女二の宮の、物おぼしめすさま、はれ〳〵しくならせ給はんまで、宮す所たいらかにすぐし給

ハんこそ、「たが御ためにも」とハ、女二の宮ためにも、（マヽ、「の」脱）ミや所の御ためも、（マヽ、「に」脱）たのもしからめ、と也。「身にかふばかりに」、引哥、ちる花を身にかふおしめどもかなはでとし〈4ウ〉のおひにけるかな。（マヽ、「ばかり」脱）

「あなたざまにおぼしゆづりて」とハ、御息所の御とぶらひとばかりおぼすは、つもりぬる心ざしをもしろしめされぬやうなるハ、ほいなき心ちす、と夕ぎりの給ふ也。げに、と人〻きこゆ。

一、「かきほにおふる」、引哥、あな戀しいまも見てしが山がつのかきほにおふるやまとなでし子。

一、「たつこゑもゐかハるも」とハ、かハる人、たつ人の、こゑひとつにきやうよミあハせたる、たうとき、と也。よろづ物哀にて、たちいで給ハぬ心ちせで、夕ぎりながめ給ふ也。りつしも、だらによミ給ふ也。

一、「いとくるしげに」とハ、宮す所くるしがり給ふとて、人〻そなたにつどひまいりて、女二の宮のおまへハ、人ずくなにて、女二の宮ハながめ給ふ也。

一、おもふ事をもうちいでつべきおりかな、とおぼして、夕ぎりまかでんかたもなき心ちして、いかゞすべき、とて、よミ給ふ。〈5オ〉

一、「山ざとのあハれをそふる夕ぎりにたちいでんそらもなき心ちして」、この御すまひのあハれそひて、かへらん心ちせぬ、と也。此哥にて、夕ぎりの大將（だいしやう）ともいひ、まきの名（な）にもせる也。

一、「山がつのまがきをこめてたつきりも心そらなる人ハとゞめず」、宮す所のとぶらひにおハしましたるとこそおもひつるに、けさう心にておハしたる人ハ、いかゞとゞむべき、と女二の宮よミ給へる也。

一、「ほのかにきこゆる」とハ、女二の宮、此哥の給へるこゑ、ほのかに夕ぎりきゝ給へるに、かへるさわすれはて給ふ也。

(一)、「きりのまがきハ、たちとまるべくもやらハせ給」とハ、をひかへし給ふ、といふ心也。引哥、しねとてやとりもあへずハやらハるゝいといきがたき心ちこそすれ。遂（つゐ）の字（じ）、やらふ、とよむ。

一、「つきなき人」とハ、好色につき〴〵しからぬ人ハ、かゝる所をしわづらふ、と也。〈5ウ〉

一、「としごろもむげに」とハ、夕ぎりのけさう心、女の宮みしり給ハぬにてハなけれども、しらぬがほし給へるに、かくことばいだしていひかゝり給へば、わづらハしくて、御いらへもなければ、夕ぎり心のうちに、又かゝるおりあらじ、と思ひめぐらし給へる也。なさけなき物にはおもハれ奉るとも、いかゞハせん、思ひわたるさまをだにしらせ奉らん、ときり、人をめせば、「御つかさのぞうより」とハ、右近のぞうより五位（ごい）になりたる人、と也。夕ぎり、しのびやかにめしよせて、「ごしん」とは、護身法（ごしんほう）也。「こよひハ此わたりに」とは、女二の宮の御あたりに、たちやすらはん、との給ふ也。「そやのじはてん」とハ、初夜（しよや）の時（じ）也。ときはてん也。「かのゐたる」とは、りつしのゐたるかたにゆかん、と夕ぎりの給ふ也。「くるすのゝさう」、夕ぎりの知行（ちぎやう）也。「まぐさなどゝりかハせ」とは、むまにくさとりかハせに、くるすのへゆけ、との給ふ也。〈6オ〉

一、「このわたりにやどかり侍る」とハ、女二の宮のみすのもとに、おなじくハ、ゆるさせ給へ、と夕ぎりの給ふ。あざりおるゝ、りつしのをこなひはてゝいで給はんまで、やすらはん、との給ふ也。

一、れいハ、かやうにながゐして、あざればミたるけしも、（マヽ、「き」脱）夕ぎりみえ給ハぬを、うたてもあるかな、と女二の宮おぼす也。「あなたに」とハ、宮す所のかたに、かろらかにはひわたるべきにもあらずと、たゞをとせでおハする也。

一、「とかく聞えよりて」と、夕ぎり、御せうそこつたへにゐざりいる人のかげにつきて入給ぬ。まだ夕ぐれの、きりにとぢられて、うちハくらきに、「みかへりたる」とハ、ゐざり入女ばうの、ミかへりたる也。

一、女二の宮ハむくつけうなりて、きたのミさうじのとにゐざりいでさせ給を、たどりよりて、ひきとゞめたてまつりつ。女二の〈6ウ〉宮の御身ハ入はて給へれど、御ぞのすそのこりて、さうじハあなたよりさすべきかたなかりければ、ひきたてさして、ミづのやうにあせながれてわなゝきおハす。人〻もあきれてゐたり。こなたよりこそさすかねなどもあれ、いとわりなし。「さすかね」ハ、かけがね也。あらあらしくひきかなぐるべくも、夕ぎりみえ給ハねば、思ひよらざりける御心のほどにと、なきぬばかり人〻きこゆれど、かばかりにてさぶらはんを、人よりけにうとましう、おぼさるべきにやハ侍る。御みゝなれぬるとし月もかさなりぬるを、とて、さまよくもてしづめて、おもふ事聞えしらせ給ふ。きゝいれ給ふべくもあらず、女二の宮くやしう、かくまでとおぼせば、の給ハんこと、はたなし、とおぼす也。

一、わか〳〵しき御さまかな。すき〴〵しきつミばかりこそ侍らめ、これよりなれ過（すぎ）たる事ハ、さらに御心ゆるされでハ御らん（「ぜ」脱カ）られじ。いかばかり、〈7オ〉「千（ちゞ）ゝにくだけ侍る」、引哥、きミこふる心ハ千（ちゞ）ゝにくだくれどひといもちらぬ物にぞありける。さりとも、をのづから御らんじしるふしも侍らん物を、とおもふに、しゐておぼめかしう、けうとうもてなせ給へば、いかゞハせん。心ちなくにくしとおぼさるとも、かうながらおもふ事のくちぬべきうれへを、さだ申（マヽ、「かに」脱カ）しらせんとばかりなり。いひしらぬ御けしきのつらき物から、かたじな（マヽ、「け」脱）ければとて、なさけふかうよういし給へり。

一、さうじを女二の宮をさへ給へるハ、はかなけれど、夕ぎりひきもあけず。「かばかりのけぢめを」とハ、かくばかりのへだてなりとも、女二の宮しゐておぼさるらんこそあハれなれ、と夕ぎりうちわらひ給て、うたて心のまゝにもあらず。「人の御ありさまの」とハ、女二の宮の御ありさま、あてなまめひ給へる事、さハいへど、こと（「に」脱カ）にミゆ。かたちすぐれ給ハぬといへども、たゞ人にハことにみえたる也。〈7ウ〉

一、よとゝもに物思ひ給へるけにや、やせ〳〵にあへかなる心ちして、「うちとけ給へるまゝの」とは、つねのさうぞくのまゝの御そでぐちもなよびかに、けぢかう、やハらかなる心ちし給へり。「よとゝも」ハ、常住（じやうぢう）に也。「えんなるほどなれば」とハ、物おもしろき心ち也。艶（えん）なる也。

一、「あハつけき」とハ、心かろ〴〵しき人だに、ねざめしぬべき夜（よ）のけしきを、かうしもをろさず、入がたの月のかげとゞめがたふ物あ（マヽ、「は」脱）れ也。

一、かうおぼししらぬ御ありさまこそ、かへりて、あさく御心のほどしらるれ、と夕ぎりの給ふ也。「かうよづかぬまでしれ〴〵しき」とハ、心おちつかぬほど、をろかなる、「うしろやすなど（マヽ、「さ」脱）」ゝハ、好色にをろかなるゆへしゐてもいひかゝらぬを、うしろやすくハ、おぼさで、の心也。

（一）、「なにごともかやすき人こそ」とハ、かろ〴〵しき人こそ、「しれ物などいひて」とハ、をろかなる物になりて、ざれ〳〵しくうちわらひかゝりなど〈8オ〉して、人の心をもやぶりゆるさぬ事をもすれ。われハ、さやうにあらじ、物をこよなくおぼしおとしけるに、えしづめはつまじき心ちし侍る。「よの中をおぼししらぬにしもあらじ」とハ、おとこ心おぼししらぬにてもなしと、よろづにせめられ給て、女二の宮いかにいふべき思ひめぐらし、「世（よ）をしりたるやうに」（「と」脱カ）とハ、おとこ心しりたるやうに、夕ぎりおり〳〵いふも、めざましう、げにたぐひなき身のうさとて、うきミづからのつミを思ひしるとても、かうあさましき、夕ぎりのもてなしを、いかやうに思ひなすべき、ほのなき給て、（マヽ、「かに」脱）

（二）、「われのミやうき世をしれるためしにてぬれそふそでをなをくだ

すべき」。うきおとこゆへ、物おもひするに、又、夕ぎりゆへ、名をくたすべき事、と女二の宮かなしび給ふ也。の給ふやうにもなく、ほのかなるを、夕ぎり心に吟じつゞけて、うちずし給へる也。〈8ウ〉

一、「いかにいひつる」とハ、女二の宮、いかによミつるぞ、とおぼるゝに、夕ぎり、げに、あしう吟じつる、とほゝゑミ給ふ。

一、「大かたわれ（マヽ、「は」脱）ぬれぎぬをきかせ（マヽ）ずともくす（マヽ、「ち」カ）にし袖の名やハかくるゝ」、わがうき名をたて奉らずとも、かしハ木ゆへくたし給し袖ハかくしかたからん、と也。「ぬれぎぬ」ハ、なき（マヽ）名たつこと也。引哥、

一、よとゝもにわがぬ（マヽ、「れ」脱）ぎぬとなる物ハわぶるなミだのきする也けり。

一、「ひたぶるにおぼしなりね」とハ、一向（いっかう）になびき給へ、と夕ぎりの給ふ也。

一、月のあかきかたにいざなひいづるを、女二の宮、あさましとおぼす也。心づよくもてなし給へど、夕ぎりひきよせて、かばかり御心やぶらぬ心ざしを御らんじしりて、心やすくおほせゆるし給ハざらんかぎりハ、さらに実事（じち）すまじきと、けざやかにの給ふ也。「こぎミの御事も」とハ、かしは木の事も、いひいでゝ、さまよくもてなし給也。「すぎにしかたに」とハ、かしハ〈9オ〉木におぼしおとす、とうらみ給ふ也。

一、「御心のうちにも、かれハ」とは、かしハ木ハくらゐなどもをよバざりしかども、朱雀院、御息所なども ゆるし給て、見なれしだに、めざましかりつるに、ましてかうあるまじき事にて、ことによそにきく人にてもなし。内府（だいふ）のむこにてある人に、うき名（な）たちてハ、大とのゝきゝおぼさん事、朱雀院にもいかにきこしめさんと、はなれぬこゝかしこの御心をおぼしめぐらすに、わが心ひとつにつようおもふとも、人の物いひいかならん、御息所もしり給ハざらんもつミえがましく、かくきゝ給て、心おさなきとおぼしの給ハんもわびしきに、よをあかさでだにいで給へと、やらひ給ふよりほかの事なし。

「やらひ」ハ、をひかへし給ふ也。逐（ちく）の字（じ）也。をふ也。

一、「ことありがほにわけ侍らん」とハ、実事（じつじ）ありがほに、夜（よ）ふかくわけゆかんあさ露のおもはんさまよ。さらばおぼししれ、との給ふ也。

「おこがましき」〈9ウ〉とハ、をろかに、ざれがましきさま、みえ奉りて、かしこうすかしやりつとおぼしはなれば、そのきわゝ、心もおさめあへまじく、御心もややぶり侍らん、しらぬ事〳〵、けしからぬ心づかひにやいでき侍らんとおもふとて、いで給ふ也。ゆくりかにあざれたる事、ならひ給ハぬ心ちに、いとをしく、女二の宮の御心を夕ぎりおぼす也。「ゆくりかに」ハ、卒爾（そつじ）に也。わが身ながら、あだ〳〵しき心いできなば、心おとりやせん、と夕ぎりあらハなるまじきほどのきりにかくれていで給ふ。心空（そら）なり。

一、「おぎハらやのきばの露にそぼちつゝやへたつきりをわけぞゆくべき」、おぎハらの露、なミだにぬれゆかん、と也。「ぬれぎぬハ」とは、なき名（な）ハえのがれ給ふまじき、と夕ぎりうらみ給ふ也。「やらハせ給ふ」とハ、かうをひかへし給ふ御心づからこそ名（な）ハたつべけれ。ひそかに心かハし給ハゞ、かうハあるまじき、と也。「心のとハんにだに」、引哥、なきなぞと人にハいひてありぬべし心のとハゞいかゞ〈10オ〉こたへん、とおぼせば、さらに心とけ給ハぬ也。

一、「わけゆかん草（マヽ）ば（くき）露（マヽ、「の」脱）をかごとにてなをぬれぎぬをかけんとやおもふ」、めづらかなる事、とあはめ給ふもはづかしげなる、と也。「あはめ」ハ、はぢしむる也。

一、としごろ人にゝぬ心ばせ人になりて、なさけをみえ奉りしなごりなく、うちた遊（ゆ）め、すき〳〵しきやうなるがはづかしげなれば、をろかならずおもひかへして、いで給へる也。かうあながちにおれてしたがひても、のちおこがましく、よせつけられずハ、いかゞせんと出給（いで）ふミちの露けさも、おぼしミだるゝ也。

一、とのにおハしまさば、くもゐのかり、かゝるぬれを、とがめ給ふ

べければ、六条院の花ちる里にまうで給ぬ。「かしこにハいかに」とハ、女二の宮の御心をいかに、とおぼしやる也。人〻ハれいならぬ夕ぎりの御ありきかなと、さゝめく也。

一、しバしうちやすミ給て、御ぞぬぎかへ給ふ。夏冬とつねに花ちる里、夕ぎりの御さうぞくしをかせ給へば、とうでゝ奉り給ふ。「とうでゝ」ハ、とり出て也。〈10ウ〉

一、「おまへにまいり給ふ」とハ、源氏のおまへに也。「かしこに」とハ、女二の宮に、御ふミたてまつり給へど、御らんじもいれぬ也。あさましかりし夕ぎりのもてなし、めざましく、又、宮す所のもりきゝ給ハんもはづかし。又、かゝる事をかけてしり給ハざらんに、たゞならぬ夕ぎりのふミにても見つけ給ひ、人の物いひかくれなくて、きゝあハせて、へだてけるとおぼさんがくるしければ、人〻ありしまゝに宮す所に聞えもらせかし、うしとおぼすとも、いかゞハせん、とおぼす也。

一、おや子の御中といふ中にも、露へだてず思ひかハし給ふ也。よそ人ハもりきけど、おやにハかくすたぐひこそあれ、と女二の宮ハ、さもおぼさぬ也。

一、人〻ハ、なにかハ、宮す所ほのかにもきゝ給て、実事ありがほにおぼしみだれん。まだきにと心ぐるし、といひあはせて、いかならんと、おもふ。「此御せうこの」とは、夕ぎりよりの御文、ゆかしく人〻おもふ也。女二の宮、ひきあけもし給ハねば、むげにかへしかき給ハざらんも、わか〳〵しきやうにぞ侍らんとて、ひろ〈11オ〉げたれば、あやしう何心なくぞミゆる、人にかばかりにてもみゆるあはつけさの、ミづからのあやまちに思ひなせど、おもひやりなきあさましさもなぐさめがたくなん。えみずとをいへ、と、ことのほかにてよりふさせ給ぬ。さるハ、ふミにくげもなく、心ふかくかひ給へり。

一、「玉しゐをつれなき袖にとゞめをきてわが心からまどハるゝかな」、女二の宮の御袖に玉しゐとゞめてわが心とまどハるゝ、と也。「ほかなる物ハ」、引哥、身をすてゝいにもやしけん思ふよりほかなる物は心也けり。「さらにゆくかたしらず」、引哥、わが戀はむなしき空にみちぬらんおもひやれどもゆくかたぞなき。「おほかめれど」ゝハ、ことばおほくふミかき給ひたれど、人ハえまほにもみぬ也。「れいのけしきなる」とハ、まことにうちとけ給ハぬあしたのふミなれ。人〻もあやしがる也。

一、「御けしきも」とハ、女二の宮の御けしき、いかなる御事にかとなげく也。〈11ウ〉

一、なに事につけても、夕ぎりあハれなる御心ばへなるに、女二の宮に御心かけ給ふかたにたのミてハ、見おとりやし給はんおもふに、あやうく、むつまじくつかうまつる人〻ハ、女二の宮の御かたちまほならぬをいかゞと、をのがどち思ひみだるゝ也。宮す所も、夕ぎりのとまり給へる事、しり給ハぬ也。物のけにわづらひ給ふ人ハ、さハやぎ給ふひまありて、けふハ本心になり給へる也。

一、日中の御かぢはてゝ、あざりたちとゞまりて、よろしうおハしますをよろこび給て、「あくりやうハしうねき」とハ、れいこんハしうしんふかきといへども、ごうしやうにまつハれど、つミとがにまとひて、人につきてなやますはかなき物也、と、りつしの給ふ也。「業障」、はれがたき物、と也。

一、ゆくりもなく、そよや。この大将ハ、いつよりこゝにハかよひ給ふ、〈12オ〉とうちをどろきがほに、りつしとひ申給ふ也。「そよや」とハ、いで、それよ、といふ心也。さればよ、といふ心ともいへり。

一、宮す所、さる事も侍らず。「こ大納言の」とハ、かしは木の、よき中にて、かたらひつき給へる心たがへじ。此としごろ、いとあやしくかたらひ給ふ。かくわづらふをとぶらひにとてふりたちより給へ

るを、かたじなくき〻（マヽ、「け」脱）侍し、との給ふ。「ふりはへ」ハ、わざと也。「かたじけなく」ハ、はゞかりおほく也。

一、「いで、あなかたわ」とハ、女二の御（マヽ、「宮」脱）ためきずつく事、と也。何がしにかくし給ふべき事ならず。けさ、後夜にまいるに、にしのつま戸より、かうバしきおとこのいで給へるを、何がしハみわき奉らざりしを、このほうしばら、大将どの〻いで給へるなり、と申つるなり、と律師の給ふ也。

一、「此ことといとせちにもあらぬ」とハ、大切にもなき也。「人ハいうそくに」とハ、夕ぎり、才覚すぐれ給たる、と也。何がしらも、夕ぎりのわらハにおハし〈12ウ〉ましし時より、ずほうなどの事うけ給ハりて、いつかうにこ大宮のの給ひつけしかバ、いまにまいる所ながら、「やくなし」とハ、女二の宮に夕ぎりちかづき給ふ事、しかるべからず、と也。「ほんさい」とハ、くもゐのかりの、さる時にあへるぞうるいひろく、やんごとなき、と也。ぞう類と子孫るいつよくおハしますほどに、女二の宮、くもゐのかりを〻しけち給ふことはありがたからん、とりつしの給ふ也。「わか君たち七八人」とハ、くもゐのかりのはらに、わかぎミたちもあまたになり給ふ、と也。「みこのきミ」とハ、女二の宮、くもゐのかりをしけち給ハじ、と也。又、女人のあしき身をうけ、長夜のやミにまどふハ、かやうなるねたミ事よりおこる事也、と律師申給ふ也。ねたミごとよりつミふかくなる、と也。「いミじきむくひ」とハ、あくねんのむくひとなる也。「人のいかり」とハ、くもゐのいかりいでき（マヽ、「な」脱）ば、ながきほだしとならん、と也。「ほし」（マヽ、「だ」脱）とハ、身をはなミぬつミとがと〈13オ〉「もはらうけひかず」とハ、もつぱらしかるべからず、といへる心也。女二の宮に夕ぎりちかづきまいり給ふ事、しかるべからずと、たゞいひにいひきり給ふ也。

一、いとあやしき事也。さらにさるけしきも夕ぎりハみえ給ハぬを、よろづ心ちまどひしかバ、たいめんせざりしほに夕うちやミてなん（マヽ、「す」脱）たいせん（マヽ、「めん」脱）との給ふと、こゝなるごたちいひしを、さやうにてやあるらんとこそ思ひつれ、と御息所の給ふ也。心に、大かたいとまめやかにハ、すくよかにみえ給ひながら、さるやこと（マヽ）やありけん、たゞならぬ御けしきもおり〳〵ほのめかし給し物をと、夕ぎりの心を宮す所をしはかり給ふ也。「すくよか」とハ、すくやかに、実めなる人を、と也。

一、「人の御さまのかど〳〵しう」とハ、夕ぎりハ、すくやかにかど〳〵しき人なれば、人のそしるべき事ハはぶき給ふらんとこそ思ひつれ、と御〈13ウ〉息所おぼす也。はぶきかへりミ給ふらん也。身のをろかなる所かへりミる也。「うるハしだち」ハ、じちめだち也。「たハやすく」ハ、たやすく、人のゆるさぬ事ハし給ハじと、うちとけたると心うちゆるしたるに、人ずくなゝると見て、はひ入もやし給けん、とおぼす也。

一、律師たちぬるのち、小少将のきミ（こせうしやう）めして、夕ぎりはひ入給たるときゝつる、と御息所とひ給ふ。われにハ、さなん、かくなんとハ、などかきかせ給ハざりし、との給ふ也。「小少将のきミ」ハ、宮す所の御めい、女二の宮にハいとこ也。「さしもあらじ」とハ、夕ぎりハよもちかづきより給ハじ、とこそ思ひつれ、との給ふ也。

一、「いとをしけれど」〻ハ、宮所（マヽ、「す」脱）の御心をいとをしとおもへど、「はじめより」とハ、夕ぎりちかづきより給しやう、くハしう申給ふ。けさの御文のけしき、女二の宮もの給たるやう申給て、としごろしのびこめ給たる心のうちを、き〈14オ〉こえしらせ給ハんとばかりの事にて、ありがたふよういし給て、あかしもはてず夜ふかくいで給ぬるを、人いかにきこえつるにかと、律師の申給しとハしらで、しのびてミやす所に人や聞えつらん、と少将思ふ也。

一、御宮（マヽ）所、物もの給ハず、いとうくくちをしと、なみだほろ〳〵

こぼし給ふ也。

一、いとをしうて、なにゝ、ありのまゝ申つらん、と少将思ひて、御さうじハさして、女二の宮おハしましつると、よろしきやうに申なせど、とてもかくても、なにのよういなく、かるらかに人にみえ給けんこそ、くちをしけれ、と宮す所なげき給ふ也。「ようい」ハ、用心なくて也。

一、「うち〳〵の」とハ、内〻、女二の宮心きよくおはすとも、かくまでいひつるほうしばら、よからぬわらハべなどハ、まさにいひのこしてんや。さもあらぬ事といひあらがふべきにもあらず、とミやす所の給ふ也。

一、すべて心おさなき人ばかりこゝにさぶらひて、とも、の給ひやらず。〈14ウ〉くるしげなる御心ちに、物をおぼしをどろきたれば、いとをしくみえ給ふ也。

一、けだかう女二の宮をもてなさんとおぼしたるに、御息所（マヽ、「ち」脱カ）くをしくおぼす也。「よづかハしう」とハ、おとこにかる〻（マヽ、「く」脱）しおもハれ給ふ名のたち給ふべき事を、おぼしなげく也。かうすこし物おぼゆるひまに、女二の宮わたり給へ、と御息所の給ふ。そなたにまいるべけれど、うごきすべくもあらで、との給て、見たてまつらでひさしうなりぬる心ちす、との給ふ也。

一、「まいりて、しかなん」とハ、女二の宮に、かく御息所の給ふ、と申す也。

一、わたり給ハんとて、御ひたゐがミのなミだにぬれまろがれたるひ（マヽ、「を」）きつくろ（脱カ）ひ、（マヽ、「ひ」脱）とへの御ぞのほころびたる、きかへなどし給ふ。夕ぎりのひきほころバし給たる御ぞ也。「とみにも」とハ、にわかに、うごきもし給ハぬ也。「此人〻も」とハ、此女ばうたちも、いかにおもふらん、と女二の宮はぢ給ふ也。又、えしり給ハで、給はでのちに御息所きゝ給て、つれなくてありしよとおぼしあハせんも、〈15オ〉はづかしとおぼすに、又ふし給て、心ちのなやましきかな。やがてなをらぬやうにもなりなば、めやすからんとて、あしのけののぼりたる心ちす。「をしくださせ給ふ」とハ、あしのちけのぼる時ハ、あしをさすらすれば、ちくだりてよき也。女二の宮、いとくるしと、さま〴〵おぼしみだるゝに、けあがり給へる也。

一、「少将（せうしやう）、うへに此ことほのめかし」とハ、夕ぎりのとまり給しこと、御息所にほのめかし申たる人こそありけれ、と申て、御息所のとハせ給つれば、ありのまゝ申て、「ミさうじのかためばかり」とハ、さうじハさしておハしましたる、とことそへて、物ごしにかたらひ給たる、けざやかに申つる、ときこゆる也。「ことそへて」とハ、ことばくハへて、といへる心也。「おなじさまに」とハ、わが申たるやうにおなじさまに、女二の宮御息所にの給へ、と少将申也。「なげひ給へるさま」とは、御息所のなげ（マヽ、「き」脱カ）のほどハ、少将のきミ申さぬ也。

一、「さればよ」とハ、女二の宮、されば、かやうに人いひなすべき事と〈15ウ〉おぼして、物もの給ハぬまくらより、しづくおちける也。

一、この事のミにあらず、と夕ぎりの事ばかりにかぎらず、かしは木のおもハずにみえし時、御息所のおり〳〵なげき給し事、女二の宮おぼしいでゝ、いけるかひなくおやに物おもハせ奉る、とおぼす也。

一、「此人ハ」とハ、夕ぎりは、なを思ひやまず、いひかゝづらひ給ハんも、心くるし。「まして、いふかひなく、人のことによりて」とハ、人のいひなすことばによりていかなるうき名をくだすべきか、と女二の宮おぼしわぶる也。

一、「すこしおぼしなぐさむる」とハ、実事なかりしばかりを、心ひとつになぐさめおぼす也。さりながら、かばかり貴人の、すゞろに人にミゆるやうハあらじ、と女二の宮思ひなげき給ふ。

一、「なをわたらせ給へ」とハ、御息所、しゐてわたり給へ、との給へ

ば、中のぬりごめの戸あけて、女二の宮わたり給へる也。〈16オ〉

一、「くるしき御心ちにも」とは、宮す所、「なのめならずかしこまり」とハ、大かたならずはゞかりかしづき給ふ。「つねのさほうあやまたず」と、（マヽ、「ハ」脱）つねのぎしきたがへ給ハず、おきあがり給て、いつきかしづき給ふ也。「みだりがハしく」とハ、物のけに心みだれて、こなたへわたらせ給へと申も、心くるしけれ。此ふつかミか見奉らねば、とし月へだゝりたる心ちする、と御息所の給ふ也。「のち、かならず」とハ、なくなりてのち、たいめんあるべきにもあらずとおもへば、かなしき、と也。「又めぐりまいるとも」とハ、玉しゐのあまがけりて、まいるとも、かひあるべからず。たゞ時のまにへだゝりゆかんよの中を、あながちにならひけるも、くやしうとて、なき給（マヽ）給ふ也。

一、女二の宮も、かなしうとりあつめおぼさるれば、の給ふ事もなくて見たてまつり給ふ。物づゝし（マヽ、「ミし」カ）ミ給て、おぼす事をも、宮す所にいひさハやぐべきかたなくて、はづかしとのミおぼすに、いとをしとおぼして、御息所〈16ウ〉も、いかなりし事とも、夕ぎりのことを、とひ給ハぬ也。女二の宮、物きこしめさずときゝ給て、てづからまかなひなをしなどし給へど、ふれ給ふべくもなき也。きこしめしふれぬ也。くちにもふれ給ハぬ也。「御心ちのよろしき」とハ、御息所の心ちすこしよくみえ給ふぞ、女二の宮、むねあく心ちし給ふ、と也。

一、「かしこより御文あり」とハ、夕ぎりより御文あり。心しらぬ人とりいれて、大将殿より少将のきミとて御つかひあり、といふ也。御文ハ少将とりつ。御息所、いかなる御文ぞ、とゝひ給ふ。「人しれず」とハ、夕ぎり実事ありたらば、三ケ夜おハしまさんと、人しれず御息所まち給へるに、御文ばかりあるを、心さハぎして、夕ぎりおハしまさぬを、あやしとおぼす也。いでその御文よとて、宮す所めしよする也。「なをきこえ給へ」とハ、かへしかき給へ、と女二の宮にの給ふ也。〈17オ〉

一、「人の御名をよざまに」とハ、よきさまにいひなす事ハ、ありがたき、と也。「そこに」とハ、女二の宮、心きようおぼすとも、しかもちいる人ハすくなくこそ、とかう女二の宮ハ夕ぎりに実事なかりしとの給ふとも、まことゝもちいる人あるまじき、と也。心うつくしく夕ぎりにいひかハし給へ、との給ふ也。いま、かへしし給ハずハ、あまへたるさまならん、と也。「あまへたる」とハ、人にあまりおもハれだてしたるやうならん、の心也。「めしよす」とハ、文を御息所めして、ミ給ふ也。少将くるしくおもへど、文御息所にミせ奉たる也。

一、「あさましき御心のほど」ゝハ、女二の宮、つれなくおハしますと見たてまつりあらハしてこそ、「ひたぶる心もつきぬべけれ」とハ、いつかうに御心もやぶるべき心つきたる、とふミにかき給へる也。

(一)、「せくからにあさくぞみえん山川のながれての名をつゝはてずは」、〈17ウ〉われをせきかへし給ふに、女二の宮の御心あさくこそなるべけれ。ながらへてゆくすゑまでの名をつゝみ給ハずと、もしわれならぬ人にあひミ給ひなば、いよ〳〵御名ハたつべき、の心也。「ことおほかれど」ゝハ、文のことばおほけれど、御息所、見もはて給ハぬ也。

一、「御文にも」とハ、夕ぎりのふミにも、実事ありてハ、みえぬ也。「めざましく心ちよがほに」とハ、つゐにかたらひとらんといふやうに、夕ぎりかき給て、こよひおハせぬハ、めざまし、と御息所おぼす也。「こかんのきミ」とハ、かしハ木の、女二の宮ふかくおもハぬかほせし時、うしと思ひしかども、大かたのもてなしハ、又ならぶ人なく、女二の宮を本妻とあがめ（マヽ）しかしづきつれば、女二の宮のかたにちからある心ちしてなぐさめしだに、心もゆかざりし、とおぼ

す也。「あないミじ」とハ、夕ぎりの女二の宮にいひより給ふことハ、内府のきゝ給ハん事、とふかく御息所思ひしミ給ふ也。夕ぎりいかゞ〈18オ〉の給ふと、けしきみんと、心ちみだれめもくるゝやうなるを、しぼりあけて、とりのあとのやうにかき給ふ。「とぶらひにわたり給へる」とハ、女二の宮たのミなくなりたるを、見まひおハしましたるおりふしにて、御かへしそゝのかしけれど、かき給ふべきけしきにも見え給ハねば、見わづらひて、かき侍るとて、宮所（マヽ、「す」脱）、

一、「をミなへししほるゝ野べをいづことて一夜ばかりのやどをかりけん」、女二の物（マヽ、「宮」脱）おもひしほれはて給ふさまを、いづこと思て、たゞ一よにてとひすて給へるぞ、と也。かきさして、をしひねりて文をいだし給へるまゝに、物のけのとりいれけるといひさハぐ也。れいのげんざ、いのりさハぐ也。「宮をば」とハ、女二の宮ハ、にしおもて人わたり給へ、と人〻いへど、をくれ聞えじと、つとそひておハする也。

一、「大将どのハ」とハ、夕ぎりハ、ひるつかた、三条どのにわたり給へり。こよひ〈18ウ〉をのにまうでんとおぼせど、実事ありがほに、人ぎゝもいかゞとねんじ給て、「ちへに思ひかさへ（マヽ、「ね」カ）給ふ」、引哥、心にハちへにおもへど人にいはぬわがこひづまをミんよしもがな。

一、「きたのかたハ」とは、くもゐのかりは、かゝる夕ぎりの御ありきのけしきを、心やまし、ときゝゐ給へり。

一、「よひすぐるほどにぞ」とハ、をのよりの文の御返しもてまいりたる也。とりのあとのやうにかき給たれば、夕ぎりにわかにハ見とき給ハで、御となぶらとりよせてミ給ふを、くもゐのかり、物へだてたるやうなれど、はひよりて、ふミをとり給たる也。こハいかにし給ふぞ。六条院の花ちる里の御ふミ、けさかぜおこりてなやミ給しを、源氏の御まへよりかへりたれば、心もとなさにまいらせ給たる文の返し也。見給へ、けさうぶミにてハなき、と〈19オ〉夕ぎりの給ふ也。「なを〳〵し」とハ、いやしきやうにとし月にそへて、あなづり給ふこそうれたけれ、との給ふ也。「うれたき」ハ、うれハしき、と也。

一、「おしミがほにも」とハ、文おしミがほにも、ひこじろひなどし給はねば、くもゐのかり、ふとも見給ハで、もち給へる也。

一、とし月にそへてわれをこそあなづり給へ、とくもゐのかりの給也。「うるハしだち」とハ、夕ぎりのまめだちての給ふに、はゞかりて、くもゐかり（マヽ、「の」脱）たゞわかやかにてゐ給へば、夕ぎりうちわらひて、「そハともかくも」とハ、それハともあれかくもあれ、又あらじ、わがやうにまがふかたなくくもゐのかりひとりをまもらへて、物おぢしたるおとこハあるまじき、と夕ぎりの給ふ也。

一、「鳥のせうの」とハ、たかハ、おんどりのめんどりにおぢしたがふ也。そのたかのせうのやうなるおとこハ、あるまじき、と也。たかのおん〈19ウ〉どりをせうといふ。めんどりをだいといへる也。くもゐのかりにおぢたるを、いかに人わらふらん、と夕ぎりの給ふ也。

一、「さるかたくなしき」とハ、わがやうかたわなるおとこ（マヽ、「に」脱カ）まもられてゐたまへるハ、くもゐのかりのためにもたけき事ならず。あまたの人の中に、すぐれてちうあひせらるゝこそたけきおぼえなれ、との給ふ也。よそのおもひやりも、わが心ちにもあまたのおもひ人すぐれてもてなさるゝこそふりがたく、心もわかやぐやうならめ、と夕ぎりの給ふ也。

一、「おきなのなにがし」とハ、たけとりのおきなのかぐやひめまもりたるやうに、くもゐかり（マヽ、「の」脱）ばかりまもりてゐたれば、そなたの御ためにもくちをしく、はへ〳〵しからぬとぞ人もおもふらん、と夕ぎりの給ふ也。

一、「此ふミの」とハ、ミやす所の御文のけし（マヽ、「き」脱）ならぬやうにおこつりとらん、とし給ふ也。「おこつり」とハ、ざれ〳〵しくいひなして、ふ

ミとらん、と也。「おこの物」、〈20オ〉ざれたる物をいふ也。「あざむき」ハ、あなづり申給ふ也。

一、「物のはへ〳〵しさ」とハ、あまた思ひ人すべてはへ〳〵しさつくり給ハん、と夕ぎりたくミ給ふほどに、ふりぬるわが身くるしき、とくもゐのかりうちわらひての給ふ也。「いまめかしさも」とハ、めづらしき事も、みならハねば、くるしき、との給ふ也。「かねてよりならハし給ハで」、引哥、かねてよりつらさをきミがならハさでにわかに物をおもハするかな。かくの給ふが、くもゐのかりにくゝハあらず、と夕ぎりおぼす也。

一、にわかにとおぼすばかりにハ何事か物おもハせ奉る、とまへの引哥のことばをとりて、夕ぎりの給へる也。「御心のくま」とハ、心のおく、といへる心也。

一、「よからず物きこえなす」とは、あしくくもゐのかりに物いひしらせ奉る人ぞあるべき。「もとより丸をゆるさぬ」とハ、むかしも六位すくせといひしごとく、めのとなどくもゐのかりいひはなたんとするか、との給ふ也。〈20ウ〉

一、「みどりの袖のなごり」とは、夕ぎりのくらゐ、あさみどりとめのといひくだしたるを、いま又（マヽ、「ゐ」脱）くものかりをいひはなつべきか、の心也。

一、「あなづらハしき」とハ、われをあなづりて、めのとことかたにくもゐのかりもてなしやり奉らんとおもふやうあるか、と夕ぎりの給ふ也。

一、「人の御ためも」とは、女二の宮の御名をもたてゝ、いとをしき、と夕霧の給ふ也。

一、「つゐにあるべき事」とハ、女二の宮につゐにハちぎりむすびはてん、と夕ぎりおぼせば、あらがひ給ハぬ也。

一、「大輔のめのと」ゝハ、くもゐのかりのめのと、夕霧の給ふ事きゝて、物いハず、くるしと思ひゐたる也。「いひしろひて」とハ、くもゐのかりと夕霧とかくいひあひ給て、文はひきかくし給たる也。

一、「せめてあさりとらで」とハ、しゐても、ふミもとめとらで、夕ぎりおほとのごもれる也。「むねはしりて」とハ、むねもひしげて、と也。引哥、〈21オ〉人にあはんつきのなきよにおもひおきてむねはしり火に心やけをる。

一、「女ぎミの」とハ、くもゐのかりのね給へるに、よべのおまし（マヽ、「の」脱カ）した を、さりげなくて、さぐり給へど、文なき也。あけぬれど、夕霧おき給ハぬ也。

一、「をんなぎミハ」とは、くもゐのかりハ、きんだちにをどろかされて、とくゐざりいで給へる也。「よろづにうかゞひ給ふ」とハ、ふミをうかゞひもとめ給ふ也。くもゐのかりハ、夕霧のしゐてももとめ給ハねば、けさうぶミにてハなきと、心にもいれず、きんだちのあそび給ふにまぎれて、とりしふミの事もうちわすれ給へる也。

一、「おとこぎミハ」とは、夕ぎりハ、こと事おぼさず、又みずしてハ、をのにの給ひやらんこともいかゞ、と思ひやすらひ給へる也。

一、ふミをミぬやうにかきやり給はんも、文をちらしたるとや宮す所おぼさん、と夕霧おもひやすらひ給ふ也。〈21ウ〉

一、よべの文のさま何事かありし。見せ給ハで。けふは六条院にもまいるまじきに、花ちる里に文をこそ奉るべけれ。その文よとの給へば、くもゐのかり、文ハおこがましうとりてけるとおぼして、きのふの文の事ハことばにかけ給ハず、ひとよのミ山かぜに、あやまりてなやましくてなどゝ、おかしうかこち聞え給へかし、とくもゐのかりの給ふ也。「かこち」とは、かこつけ給へ、と也。

一、「いで、此ひがことな」とハ、女二の（マヽ、「宮」脱）事なつねにの給ひそ、と夕ぎりの給ふ也。「よ人なずらへ給ふ」とは、よの中人のざれたはぶるゝにわれをくらべてなの給ふ（マヽ、「ひ」カ）そ。此女ばうたちも、あやしきまめざま

をあなづり給ふ、とほゝゑむらん、と夕ぎりたハぶれ事にいひなして、そのふミよ。いづら、との給へど、くもゐのかり、とみにもとりいで給ハぬ也。

一、「山のかげいかに」とは、をのにいかに「きりふたがり」とハ、女二の宮いか〈22オ〉にはれ〴〵しからず物おもひておハしますらん、とおぼす也。

一、「此御かへり」とハ、きのふの御ふミのかへりごとをだにせで、宮す所もいかにうらみ給ふらんと、たゞしらずがきにふミかゝん、と夕霧おぼす也。「いかになしてし」とハ、きのふの文、いかになしたるとかいはん、と也。

一、「おましのおくの」とハ、しきたるむしろのあがりたる所を、ひきあげ給たれば、此したに文さしはさミかくしをかれたる也。おこがましうもおぼして、うちゑミて給ふ也。「心ぐるしき」とハ、宮す所のうらみ、ふミなれば、夕霧むねつぶれて、一夜女二の宮のかたにとまり給たる事を実事ありがほにやきゝ給ひつらん、と心ぐるしうおぼす也。

一、「くるしげに」とハ、宮す所くるしげにかき給たる御ふミなるに、けふの御かへしだにきこえぬを、つらく思ひ給つらん、とくもゐのかりのふミをかくし給へりしを、つらくおぼす。「あだへかくして」とハ、ふミあだにかくし給て也。〈22ウ〉

㈠、「すゞろに」とハ、心ならずに也。「わがならハし」とハ、くもゐのかりをあしくならハして、心おごりし給へる、と也。

一、「やがていでたち給ハんも」とハ、をのにこよひおハせんも、心やすく女二の宮たいめんあらん事もしらず、又宮す所もかくの給へば、もし思ひゆるし給ハゞ、かんにちにてあれば、あくにちにハ、嫁娵いかゞとおぼす也。

一、「よからんことを」とハ、ゆくすゑよきやうにちぎりそめてこそ、と也。引哥、いかにしていかによからんをの山のうへよりおつるをとなしのたき。ことばバかりを引也。

一、「うるハしき」とハ、夕霧まめ心におぼす也。此返りごとを、まづし給ふ也。

一、「此とがめを」とハ、一夜やどかりたると宮す所の給ふハ、いかにきこしめしたるか、と也。

㈠、「あきの野のくさのしげミハわけしかどかりねのまくらむすびやハせし」。一夜たちどまりつれど、女二の宮とうちとけてハまくらむす奉らぬ、と也。「あきらめきこゆるも」とハ、実事なしとハさやかに申にくけれども、と也。〈23オ〉ひたやごもりにてやハ、とことのはあらハさで、いかゞ女二の宮にあひたてまつりたらば、まいらでハいかゞあらん、と也。「ひたやごもり」ハ、無意趣也。とかくをいはぬ事也。「宮にハ」とハ、女二の宮にハ、おほくかきをくり給へる也。「あしときむまにうつしをきて」とハ、随身のゝるくらを、うつしのくらといふ也。「ひとよの大夫をぞ」とハ、五位なりたる人也。五位を、大夫といふ也。六条院にきのふよりさぶらひたるといへ、とつかひにいふべきやうをしへて、夕ぎりをのへつかハす也。

一、「かしこにハ、よべも」とハ、をのにハ、よべも、夕霧つれなくおハしまさぬを、しのびあへず、宮す所うらみぶミかき給しに、かへしさへなくて、けふの日のくれゆくを、夕ぎりいかなる心にてとひ給ハぬぞ、とおぼす也。かくおぼすに、宮す所よろしかりつる御心ちも、いたくわづらひ給ふ也。

一、「さうじミの御心のうち」とハ、女二の宮ハ、夕ぎりのおハせぬ、うしとも〈23ウ〉おぼさぬ也。実事なかりつれば、とおぼす也。たゞおもひかけず、夕霧にみえたるばかりをくちをし、とおぼさるゝ也。「かくいみじう」とハ、宮す所の実事ありがほにおぼすを、あきらめの給ハで、はづかしとおぼす也。

一、「いと心ぐるしう」とハ、宮す所ハ、女二の宮のいよ〳〵物思ひそへ給はんことをなげき給ふ也。いまさらにむつかしき事申さじとおもへども、夕霧にのがれぬすくせとハいひながら、心おさなくて人にみえ給ひて、よ人のもどきおひ給はんと、とりかへすことにハあらねど、〻しかと夕霧うちとけあひ給たるとおぼして、いまよりだにさる心し給へ。かずならぬ身ながらも、よくはぐゝみたてまつりしに、いまハなに事をも、よの中のとある事かゝる事も、たどりしり給ふべき、うしろやすくこそおもひつれ、とおもへば、なをいはけなく、つよき心のなかりける事と、いましバしのいのちもとゞめまほしきの（マヽ、「と」脱）給ふ也。〈24オ〉

一、「たゞ人だに」とハ、いやしき人だに、すこしよろしくなるをんなの、人ふたりみるは、かろ〴〵しき事といへるを、まして内親王にておハします人の、おぼろけにて人のちかづくべきにもあらぬを、としごろ、かしハ木の北のかたになり給たるだに見たてまつりなやミしかど、朱雀院のおぼしなびきける事を、いかゞハいひかへさん。内府にゆるし給ふを、ミづからが心をたてゝ、いかゞハ申さまたげんと思ひよハり侍しに、かくするゑのよまでくちをしき御ありさまを、「わがあやまちならぬに、大ぞらをかこちて」とハ、人のすくせもてんだうのはからひなれば、大空をうらみてみたてまつりすぐすに、又、夕霧のため女二の宮の御ため、きゝにくかるべき事のいできたるハ、くちをしき、と也。

一、「よその御名をば」とハ、よそぎゝハとも、（マヽ、「かく」脱カ）いまハよのつねの夫婦のやうに夕ぎり心かハらずハ、をのづからのちなぐさむ事もや、と宮す所思ひ〈24ウ〉なす。こよなく夕ぎりなさけなく一よにて又もおハしかよハぬハいかなるべき事か、との給て、なき給ふ也。

一、「あらがひはるけん」とハ、女二の宮ハ、実事なかりしとあらがひはれ給ハんことのはもなくて、たゞなき給ふばかりなる、と也。らうたげなるを、宮す所、女二の宮をうちまぼり給て、あハれ、何事か人にハおとり給へる。いかなる御すくせにて、女二の宮やすからぬ物思ひ給ふらん、となげき給ふ也。

一、物のけなども、かゝるよハめに所うる物なれば、にわかに宮す所たえ入給て、たゞひえにひえ入給へば、律師もさハぎたち給て、ぐわんなどたてゝのゝしり給ふ也。「かたきちかひにて」とハ、ありがたく山をいでしとちかひたるを、かくおぼろけならず山をいでゝ、いのりかなハで、だんをこぼちてかへりいらん、めいぼくなく、ほとけもつらくおぼえ給ふべき事を、心をおこしていのり申給ふ也。〈25オ〉

一、「宮のなきまどひ」とハ、女二の宮のなきまどひ給ふ事、ことハり也。

一、かくさハぐほどに、大将殿より御文とりいれたる、ほのかに宮す所きゝ給て、こよひも夕ぎりおハすまじきにやとうちきゝ給ふて、心うく、よのためしに女の宮ひかれ給ふべき事、とおぼしなげく也。

一、「われさへさることのは」とハ、一よばかりのやどをかりけんとよみしこと、くやしとおぼすに、やがてたえ入給たる也。あへなく、いみじき事といふもをろかなり、と也。「あへなく」とハ、ほどなく也。「物のけに時ゝ」と、宮す所、物のけにとりいれられ、かぎりとミゆるおり〳〵ありしに、ならひ給て、かぢしさハぎけれど、いまハかぎりのさまハしるければ、女二の宮はをくれじとおぼし入て、つとそひふし給へり。かうおぼしめすとも、かぎりあるみちにハ、そひておハすべきにもあらず。又、御息所もたちかへり給ふべきにもあらず、と、さらなることハりをきこえて、なき人の御ためにも、か〈25ウ〉やうにそひておハしますハゆゝしき事、と人〻つミふかきわざと、ひきうごかしたてまつれど、すくミたるやうにて、物もおぼえ給ハぬ也。

一、「ずほうのだん」とハ、護摩のだんこぼちて、いづる也。「さるべきかぎり」とハ、さうそうなどにあはんとおもふ僧ハ、たちとまる、と也。

一、「いまハかぎりのさほう」とは、さうそうしたてまつるべきもよほしかなしき、と也。

一、「大将どのも」とハ、夕霧も、きゝをどろき給て、まづとぶらひ給へる也。

一、「ちじの大との」とハ、内府も、しげく女二の宮にとぶらひの給へる也。

一、「山のみかども」とは、朱雀院も、あハれに御文かきて、女二の宮にたてまつり給へる也。女二の宮も、此ちゝみかどの御せうそこにぞ、みぐしもたげて御らんずる也。

一、「日ごろおもくなやミ」とハ、宮す所のなやミきこしめしながら、物のけにてぞあらんと、うちたゆミてなん。御息所のわかれをバさる物にて、女〈26オ〉二の宮なげき給ふらんさまをしはからせ給ふが心ぐるしきを、よのことハりとおぼしなぐさめ、と朱雀院御文かゝせ給へる也。めもみえ給ハねど、女二の宮御かへしきこえ給へる也。

一、「つねにさこそあらめ」とハ、なくならば、やがて、さうそうせよ、とかねて宮す所の給し事とて、やがておさめたてまつる也。「御をひのやまとのかミ」とは、宮す所のをひ、やまとのかミ、よろづをあつかひ奉る也。

一、「からをだに」とハ、女二の宮は、なきがらをだにしバしとゞめてみ奉らんと、おしミ給へど、さてもかひあるべき事ならねば、いそぎたつほどにぞ、大将どのハおハしましたる也。「けふよりのち」とハ、日つゐであしきとて、かなしく女二の宮おぼすらんとて、いそぎわたり給たる也。

一、「かくしも」とハ、かやうに夕ぎりいそぎおハしますまじき事と、人〻ハ申す也。「とをくて」とハ、をのへおハしますのみちとをき、と也。〈26オ〉

一、「ゆゝしげにひきへだて」とハ、まんまくなどひきめぐらしたるかたハかくして、夕ぎりいれ奉る也。やまとのかミ、なく〳〵いでありひ奉る也。

一、つま戸のすのこにをしかゝりて、夕ぎり、女房よびいで給ふ也。かくわたり給たるに、なぐさめて、少将のきミまいりたる也。夕霧も物の給ひやらず。なみだもろならぬ心づよさなれど、所のさま、つねなきよのかなしさ、人のうへならぬ思ひつゞけ給て、やゝためらひてぞ物きこえ給ける。

一、ゆめもさむるほどハある物を、いつのまに宮す所なくなり給たるぞ、と也。

一、「おぼしたりしさま」とハ、夕霧の一夜女二の宮におハしまして、又をとづれもなかりしをなげきて、たえ入給しまゝ宮す所なくなり給たる、と少将のきミきこゆる也。

一、「さるべき事といひながら」とハ、時節到来にもや、と女二の宮おぼしながら、夕ぎりのつらき心ばへとて、いらへをの給ハぬ。〈27オ〉

一、「いかに聞えさせ給ふとか」とハ、女二の宮、夕霧の御返し、いかにの給ふと申すべきか、と少将のきミ申也。「かるらかならぬ御さま」とハ、夕ぎり、おもおもしき人の、ふりはへおハしましたるを、おぼしめしわかぬやうならん、と少将のきミをはじめ、女房たち申す也。

一、たゞをしはかりいへ。われはいふべきことなしとて、ふし給へるもことハり也。

一、たゞいまハ、女の宮なき人とおなじさまにみえ給ふ、と人〻申也。

一、「わたらせ給ふよし」とハ、夕霧、おハしましたるよしハ申たる、と也。「此人〻さへなミだにむせかへる」とハ、女房たちのありさま

也。

一、ミづからも思ひのどめ、女二の宮も、御心しづまらせ給ハんにまいらん、と夕ぎりの給ふ也。いかにしてにわかになくなり給しぞ、との給ふ也。

一、「まほにハあらねど」ゝハ、ますぐにハ申さねども、夕ぎりの一よのゝちおハしまさぬに、おぼしめしをどろきて、たえ入給たる、と申也。〈27ウ〉

一、「かこち聞えさする」とハ、夕霧、うらみきこゆるやうになりぬる。けふは心みだれ侍て、と人〻申給ふ也。「かこち」ハ、うらみ也。「きこえたがふる」とハ、申たがゆる事やあらん、と也。

一、「おぼしまどへる心ちも」とは、かならず、此せうたんしづまらせ給はんほどにこそ、きこえうけ給ハらんとて、われにもあらず、夕ぎりもおもひまどひ給へば、の給ハん事もくちふたがりて、かへり給ふ也。

一、「きこえなぐさめ」とは、女二の宮の心ちなぐさめ給へ、いさゝかの御かへり事もあらば、うれしからんとて、人さハがしければ、かへり給ふ也。

一、「こよひしもあらじ」とハ、さうそうこよひハあらじと夕ぎりおぼしたるに、いとあへなし、とおぼす也。「あへなし」ハ、ほどなき、の心也。「ちかきみしやうの人」とハ、夕霧の御りやうちの人〻めしよせて、さうそうにめしつかハれよ、との給ふ也。

一、「そぐやうなる」とハ、何事ものぞくやうなりつれど、こなたかなたの〈28オ〉人かずなどおほくいかめしくなりて、やまとのかミも、ありがたき夕霧の御心をきてと、かしこまり給ふ也。

一、「宮ハ」とは、とりあへぬさうそうを、なごりなき事、と女二の宮ハなげき給ふ也。

一、おやといひながら、宮す所のやうにハ、子をもならハすまじき物、と也。「此御事」とハ、女二の宮、又ゆゝしくなくやなり給ハんと、なげく也。

一、「のこりの事ども」とハ、やまとのかミ、七日〳〵の御とぶらひなどもとゝのへて、かく心ぼそくてハ女二の宮いかでかおハしまさん、京へいで給へ、と申給ふ也。

一、「ミねのけぶりをだに」とハ、をのゝすミがまのけぶりをだに、宮す所の御かたみにミん、と女二の宮の給ひて、此山里にすミはてん、とおぼす也。

一、「にしのひさしをやつして」とハ、服の人ハ家のすまひもかざらず、すミぞめにみす木丁もやつしてゐる也。女二の宮、にしのひさしにおハします也。

一、「ひるよもなく」とハ、そでのひるときなくに、よるひるわかぬ心こもることば也。〈28ウ〉

一、「大将殿ハ」とハ、夕霧ハ、日〻にいかに〳〵と御とぶらをのにきこえ給ふ也。

一、「宮の御まへに」とハ、女二の宮にハ、心ふかきことのはをつくしてきこえ給へど、文をとりてだに見給ハぬ也。「すゞろにあさましき事を」とハ、夕ぎりの御ふミの返しだになかりし事を、宮す所よハれる心におぼししみて、きえ入給し、と女二の宮おぼしいづるに、むねにミつ心ちし、夕ぎりの御事をだにきゝ給ふハ、つらくなミだのもよほしにおぼさるゝ也。しバしハ女二の宮御心まどひに、一くだりの御かへしもなきか、と夕霧おぼしけるに、かなしミもかぎりあるを、など、かく、あまりわが心ざしをバみしり給ハざるらん、といふかひなくおぼす也。

一、「こと事のすぢに」とハ、花やてふやなどかけていはゞこそあらめ、わが心にあはれとも、いかにともおもふ事をとハるゝハうれしくおぼゆれ、と夕霧おぼす也。大ミやのうせ給し時、内府ハ大かた

におぼしたりし〈29オ〉に、源氏よりねんごろにのちの御とぶらひをもいとなミ給しを、うれしく思ひし、そのおりに、かしハ木をば、とりわきて思ひつきたりし、人がらしづかなりしかバ、大宮のわかれをも人よりふかくかしハ木おぼしたりしなどゝ、夕ぎりおぼしいづる也。

一、「女ぎミ、此御中の」とハ、夕ぎりと女二の宮の御中、いかゞある事ぞ。ミやす所とこそ文かハしなどもこまやかなりしを、と思ひえがたき御事とおぼして、夕霧のながめ入給へる所に、くもゐのかりの給へる也。

一、「あハれをもいかにしりてかなぐさめんあるや恋しきなきやかなしき」、女二の宮の恋しくおぼすか、宮す所をかなしくおぼすか、夕霧の（マヽ）心いかゞなぐさめん、と也。心しらぬこそ心うけれ、との給へる也。夕ぎりほゝゑミ給て、さま〳〵にかく思ひめぐらして、くもゐのかりの給ふかな。「にげなのなきがよそへや」とハ、宮す所の事、くもゐのかりの給ふは、〈29ウ〉にあハぬ事かな。女二の宮の御事をこそおもへ、とおぼす也。「ことなしびに」とは、何事もなきやうにといへる心也。夕ぎり御返し、

一、「いづれとかわきてながめんきえかへり露も草ばのうへとミぬよを」、宮す所のなくなり給へるも、よそとハおもハぬわが身もなくならん事を、のがるまじければ、なべてよの中のあなたなるがかなしき、と也。

一、「なをかくへだて給へる」とハ、女二の宮うちとけての御かへりなき事を、御息所のあハれハさしをきて、夕ぎりなげきわびて、又をのにまいり給へる也。女二の宮の、御いミ過てとおぼしつれど、心しづめがたくて、をのへまいり給たる也。いまハ此なき名を、あながちにもつゝまん、と夕ぎりとおぼす（マヽ）也。「よづきて」とハ、つゐに女二の宮に夫婦のちぎりむすびはてん、とおぼす也。「きたのかたの思ひやり」とハ、くもゐのかりのをしはかり給ふ事を、あらがひ給ハぬ也。〈30オ〉

一、「さうじミハつようおぼしはなるとも」とハ、女の宮ハ、おぼしめしはなち給ふとも、宮所（マヽ、「す」脱）の一よばかりのやどをかりけんとよミ給しうたを、とらへ所にして、なき名をすゝぎはて給ハぬやうにいひなさん、とおぼす也。

(一)、「れいのつま戸のもとに」とハ、にしのつま戸に、夕ぎりたちより給て、ながめ給ふ也。色こまやかなると、こきくれなゐのしたがさねに、なをしハうすもえぎ也。「けうら」とハ、きよらなる也。きれいなる、の心也。夕日のまばゆさに、あふぎさしかくし給へるハ、女のてつきよりも、見所ある、の心也。「ゑましきかほ」とハ、うちわらハるゝやうに、夕ぎりを見たてまつる、の心也。「少将のきを（せうしやうマヽ「み」脱）」とハ、夕ぎりのそばちかく、少将をよびよせ給へる也。「すのこのほどもなければ」とは、もやのちかければ、おくに人やきくらんと、少将のきミにこまやかにも、夕ぎりかたらひ給ハぬ也。「なをちかくて」とハ、少将のきミちかくよれ、との給ふ也。〈30ウ〉

一、「へだてのこるべくやハ」とハ、かくまいりたるにハ、隔心（きやくしん）のこるべきことかハ。女二の宮のミづからの御ことのはをもきくべき、との給ふ也。「なを〳〵」とハ、なをちかく、少将のきミ、より給へ、と夕霧の給ふ也。すだれのつまつまより木丁をしいでゝ、少将のきミゐたる也。やまとのかミのいもうとにて、ミやす所の御めい、女二の宮にハいとこなれば、したしき中にもおさなき時より宮す所ならハし給へば、女二の宮とおなじくらゐなるゆへ、ぶくをもこくて、そめてきたる也。「つるばミのきぬ」とハ、ぶくゑの色也。「こうちぎゝたる」とハ、官女（くハんぢよ）ハ、も、からぎぬきる。是ハ、女二の宮とおなじやうに、こうちぎゝたる也。

一、「つきせぬ御事」とは、宮す所のかなしさハ、申すにをよバず、女

二の宮のつれなくおハしますを思ふに、玉しゐもあくがれはてゝ、みる人にもとがめらるれば、いまハ、しのぶべきかたなしと、夕ぎりうらみ給ふ也。〈31オ〉

一、「いまハの御文」とハ、宮す所の一夜ばかりのやどをかりけんとよミ給しことをも、女二の宮の給いでゝ、なきいり給て、その御かへりさへみえざりしを、宮す所かぎりの心ちに、おぼし入てしを、さるよハめに、物のけもひきいれたるとみえし、とかなしがり給ふ、と少将のきミきこゆる也。

一、「すぎにし御事にも」とハ、かしは木のなくなり給しにも、ほと〳〵御心まどふばかり宮す所おぼしけれども、女二の宮のおなじけぶりにもならんとなげき給ふを、こしらへんとて御心づよくおぼしなりたる、と少将のきミ申す也。「こしらへん」とハ、なぐさめん、の心也。

一、「此御なげき」とハ、御息所の御なげきを、女二の宮は、たゞわれかの御けしきにて、あきれておハします、と少将申す也。「われか」とは、わが身ともおぼえ給ハぬほど、心まどひ給へる、と也。「とめがたき」とは、なミだとゞめがたき也。〈31ウ〉

一、「そよや。そも」とハ、さればよ。それもあまりはかなき女二の宮の御心なり。かたじけなけれども、いまハたれをかハよるべとおぼしめさん、と夕ぎりの給ふ也。「ミ山ずミも」とは、朱雀院の御すまひも、よばなれたるくものうちなれば、いひかハし給ハん事もかたかるべし、と夕霧の給ふ也。

一、「心うき」とハ、女二の宮の御心をいひしらせ給へ、と夕ぎり給ふ（マヽ、「の」脱カ）也。

一、「よにありへじとおぼすとも」とハ、おとこにちぎりふれじ、とおぼすとも、世にしたがハぬすくせなれば、まづハ宮す所の、わかれなどの御心にしたがハゞ、あるべき事ハこれをおぼしめしりてうちとけ給へかし、などゝ、よろづにの給ふ也。きこゆべき事もなくて、少将のきミも、うちなげきゐたる也。「われおとらめや」、引哥、

一、あきなれば山とよむまでなくしかにわれおとらめやひとりぬるよハ。

一、「さととをミをのゝしのハらわけてきてわれもしかこそこゑハおしまね」、〈32オ〉をのゝ露わけて、しかのやうに、女二の宮ゆへねをなく、と也。

一、「ふぢごろも露けきあきの山人ハしかのなくねにねをそへしかな」、宮す所のためきたるぶくゑに、又、夕ぎりのなげきを思ひそへて、一しほなくねをかさねたる、と也。田夫のきるをも、藤衣といふ也。「よからねど」ゝハ、うたよからねど、こハづかひよろし、と夕霧きゝ給ふ也。

一、「御せうそこ」とは、女二の宮に、とかうきこえ給へど、宮す所のゆめになり給しを、すこし思ひさましてこそ、と御いらへの給ふ也。夕ぎりハ、いふかひなき御心と、うらみなげきてかへり給ふ也。

一、「十三日の月」、九月十三夜也。「をぐらの山もたどるまじう」、引哥、

一、あきのよの月のひかりしあかければをぐらの山もなのミなりけり。

一、「いとゞうちあばれて」とハ、一条の宮、御息所の旧跡なれば、あれわたりてミゆる也。「おろしこめて」ハ、かうしおろしたる也。「月のミ〈32ウ〉やり水の」引哥、なき人のかげだにみえずやりミづのそこになみだをながしてぞこし。「大納言こゝにて」とハ、かしは木、この宮にて、あそびし給し事を、夕ぎりおもひいで給へる也。

一、「みし人のかげすミはてぬ池水にひとりやどもる秋のよの月」、夕霧、わがとのかへり給ても、月ながめつゝ、心ハ空にあがれ（マヽ、「く」脱カ）給ふ也。

一、「みぐるしう」とハ、夕ぎり、あらざりし御くせつき給て、あくがれありき給ふ、と女房たちにくミいへる也。

一、「うへハ、まめやかに」とハ、くもゐのかりハ、真実に夕ぎりをうらみて、もとよりあまたおハします六条院の人〻を、ともすればめでたきためしにひきいでゝ、われをあひだちなきさまにの給ふ、とうらみ給ふ也。「あひだちなき」とハ、あまりあまやかすゆへ、くもゐのかりたハぶれすぎ給ふ、と也。われも、むかしよりあまたの中にならひなば、人めもな〈33オ〉れて、かなしがるまじきを、よのためしにしつべく、夕ぎりよりひとりをいつきかしづきもてなさるゝハ、うらやましき、とおやはらからにも、いはれしに、あり〳〵て、女二の宮にをしけたれ、はぢがましくいはれん事、とくもゐのかりなげき給ふ也。「あへ物」とハ、あやかりたき、の心也。

一、「かたミに」とハ、夕霧も、くもゐのかりも、の給ふ事なくて、たがひになげき給て、あさぎりもまたず、夕ぎりハをのへ文かきをくり給ふ也。

一、「心づきなし」とハ、くもゐの（マヽ、「かり」脱）、夕ぎりの文かき給へるを、心づきなくおぼせど、ありしやうにもふミをうバひとり給ハぬ也。「もりてきゝつけらる」とハ、夕ぎりしのびやかにうたを吟じ給へど、くもゐのかりきゝつけ給ふ也。

一、「いつとかハをどろかすべきあけぬよのゆめさめてとかいひし一こと」、女二の宮の、宮す所のゆめさめてとの給しハ、いつまでまつべきぞ、と夕ぎりよミ給へる也。「あけぬよ」ハ、長夜のやミ也。「うへおつる（「より」脱）」、引哥、〈33ウ〉

一、いかにしていかでよからんをの山のうへよりおつるをとなしのたき。「いかなる事ぞ」とハ、女二の宮いかなればつれなくのミおハするけしきもみまほしく、夕ぎりおぼす。御かへり、日たけてもてまいりたる也。「むらさきこまやかなる」、こきむらさきのかミにて、こ少将のきミかける也。いらへなきよしをかきて、「ありつる文に」とハ、夕霧よりの文に、女二の宮てならひ給たるをぬすミたるとて、ひきやりてふミの中に入て、まいらせたる也。「めにはみ給て」とハ、女二の宮、文をまず見給たりけるよ、と思ふばかりうれしきぞ、いと人わろき、と也。「そこはかとなき」とハ、ひきやぶりたるかミなれば、もじつゞかぬを見つゞけ給へる也。

一、「あさ夕になくねをたつるをの山ハたえぬなミだやをとなしのたき」、「とや、とりなすべからん」とハ、ひきやぶりたるかミなれば、哥かやうにてぞあるらん、ととりなしみるべき、と也。ふる哥など物おもハしきすぢをかき〈34オ〉みだり給へる、御ても見所ある、と也。

一、「人のうへにて」とハ、好色なるハ見ぐるしき事と、人のうへにみ思ひしを、げにわが身になりてハ、たへがたなきわざかな、と夕ぎりおもひしり給へる也。「うつし心」とハ、うつゝなき事、と也。かく心いられしてハ、おもハじとおぼしかへせど、心かなハぬ、とおぼす也。

一、「六条院にも」とハ、源氏も、きこしめして、おとなしうよろづ思ひしづめ、人にそしられじ、と夕ぎりを、めやすく思ひつれば、きゝぐるしき事、とおぼす也。わがいにしへあされ過して、うき名たてしおもておこしに、夕ぎりの実めなる心をうれしと思ひつるに、と源氏の給ふ也。

一、「いづかたにも」とハ、女二の宮の御ためにも、内府などのうらみあらん、夕ぎりのためにも、内府よりかるゞしくくちをしくおぼさん事を、げんじさばかり事を夕霧たどらぬ事ハあらじ、とおぼしの給ふ也。「たどらぬ」とは、〈34ウ〉さやうのしあんし給ハでハあらじを、すくせのがれがたき事、とおぼす也。とかくくちいれし、と也。「女の御ため」とハ、女の宮の御（マヽ、「め」脱）たくもゐのかりのくちをしからんをいづかたもいとをしけれ、とあぢきなく源氏きこしめしてなげき給也。「あひなき」ハ、あぢきなき也。

一、「かうやうのためしをきく」とハ、女二の宮に夕ぎり心かけ給ふにつけても、わがなくなりたらば、むらさきのうへに、いかなる人が心かけ聞えん、と源氏の給へば、むらのうへ（マヽ、「さき」脱）、心うく、さまでをくらし給ハん、とおぼにや（マヽ、「す」脱カ）、とばかりの給て、「女ばかり」とハ、女ほど、身をもてなすさま、所せかるべき物ハなし、物のあハれをもおかしき事をも、みしらぬさまにひきいり、しづミ入などすれば、なにゝつけても、はへ〳〵しき事なき也。つねなきよのつれ〴〵なぐさむほど、おもふ事をも心のまゝにいひわらひする事もなくてすぐすハ、かなしき物なる、とむらさきのうへの給ふ也。大かた、こと〈35オ〉びわをしらべ、うたをよミなどしても、心なぐさむばかりおぼしたてずハ、おやもくちをしかるべき心にのミおもひて、おもふ事いはぬむごんたいしのまねして、むごんのぎやうをするこぼうしばらのやうなるくるしミをうくる物は女なる、と也。無言太子、波羅奈王太子其名休魄容貌端生而十三年不言。是ハ波羅奈国の王の太子なるが、十三年まで物をの給ハねば、群臣いきながら地にうづミ奉らんといへる時、われさきの世にも国王たりし、正道もてくにをおさむといへども、をのづからつミとがのむくひあて（マヽ、「り」脱カ）、多生のあひだ地獄におちつれバ、それをおそれて、したをまひて物いはず、たゞ地にうづまれん、との給ふ。これをきゝて、父母群臣も、国王にあがめたてまつらんと申時、たゞ出家して深山に入て、道をもとめん、との給て、いのちおハらば、都卒天生れん、との給し也。此太子、すなハち尺迦如来なる、と也。〈35ウ〉これをまなびて、むごんのぎやうハする也。「こぼうしばら」とハ、僧をなべて、こぼうしばらといへる也。「むかしのたとひのやうに」とハ、むごんたいしのごとくに、あしきことよき事を思ひしりながら、女ハうづもれすぐすがいふかひなき物也。わが心ながらも、よきほどにいかで身をたもつべきぞ、とむらさきのうへおぼしめぐらすも、いまハ女一の宮の御ためなり、との給ふ也。

一、「大将のきミ」とハ、夕ぎり、まいり給へるつゐでに、女二の宮の御事をいかゞおぼすらん、と源氏おぼして、宮す所のいミハはてぬらん。きのふけふとおもふほどに、「ミとせのあなた」とハ、かしハ木なくなりてよりこのかた、御息所のことまでおぼしつゞけての給ふ也。「夕の露のかゝれるほど」、引、人生一生、若ニ朝露之託ニ於桐葉一耳。又、朝露貪ニ名利一、夕陽愛ニ子孫一。いかでかミそりて、よろづをそむきすてん、と源氏の給ふ也。

一、まことに、おしげなき人だに、よはすてがたき、と夕霧申給ふて、宮す〈36オ〉所の四十九日のわざ、やまとのかミ、ひとりしてあつかひ侍る。あハれなるわざなり。はか〴〵しきよすがなき人ハ、いけるかぎりハ、とにかくにてすぐるをなくなりてのはてこそかなしう侍れ、と夕ぎり申給ふ也。

一、「院よりも」とハ、朱雀院も、宮す所のとぶらひをあつかひ給ふらん、と源氏の給ふ也。「かのみいかに」（マヽ、「こ」脱）とハ、女二の宮いかになげきおぼすらん。はやうよりきゝしに、「此かうゐこそ」とハ、宮す所こそ、ちかきとしごろ、きゝみるに、くちをしからずめやすき人のうちなりけれ。大かたの世につけて、おしきわざなり。朱雀院もをどろき給たる、と也。「かのみこ」とハ、女二の宮、女三の宮より、さしつぎにハ朱雀院らうたくおぼされたれば、人ざまも女二の宮よくおハしますらん、と源氏の給ふ也。

一、御心ハいかゞ物し給ふらん。宮す所ハ、こともなかりし人のけハひにみえ給し。うちとけ給ふ事ハなかりしかども、をのづから人のよういハあらハなる物に侍る、と〈36ウ〉女二の宮のこともかけず、夕ぎりの給ふ也。「かばかりのすくよけ心」とハ、すくよか心也。すくミたる夕霧の心にて、女二の宮思ひかけ給ふにはいさむるとも、もち給ハざらん物ゆへ（マヽ、「ゐ」脱カ）、われさかしらにこといでんもあいなし、源

氏おぼしやミたる也。「さかしら」ハ、かしこだてに也。
一、「御法事の事」と ハ、四十九日の事、夕ぎりとりもちてし給ふ也。
一、「おほとの」とハ、内府も、夕ぎりの宮す所の法事とりもちてし給へるときゝ給て、さやハあるべきと、「女がたの」とハ、女二の宮の、夕ぎりうちたのミ給たるやうにあさくおぼしなす、と也。「むかしの御心あれば」とハ、かしは木のゆかりをおぼせば、内府のきんだちとぶらひまうで給て、ずきやうなどし給也。「とのよりも」とハ、内府よりも、（マヽ、「経」脱カ）ず行し給ふなり。「これかれ」とハ、かしは木のきやうだいたち也。
一、「宮、かくて」とハ、女二の宮は、あまになりてをのにすミはてん（マヽ、「と」脱カ）おぼす也。〈37オ〉
一、「院に」とハ、朱雀院に、女二の宮あまになり給ハんとおぼしたつとそうしければ、あるまじき事なり。「あまた」とハ、女三の宮の、身をやつし給たるに、又、女二の宮おなじやうになり給ふべき事ならず、うしろミなき人の、身をやつし給たるハ、中〳〵うき名をたて、つミえがましく、此よ又のちのよも、中ぞらに人にもどかるゝとがおふわざなる。「こゝにかくよをすてたる」とハ、朱雀院、法躰あり。女三の宮、あまになり給たるを、するたえたるやうに人のいふも、すてたる身にハくるしからねども、との給ふ也。
一、「かならずさしも、やうの物」とは、女二の宮おなじやうにあまにあらそひ給ハんもうたてあるべし、といさめ給ふ也。よのうきにつけてあまになるハ、中〳〵人わろきわざなり。心しづめて、ともかうもゆくするハなり給へと、たび〳〵女の宮の御かたにの給ふ也。「此うきたる名」とハ、夕ぎりのいひより給ふ事をぞきこしめしけん、とそれにつけて、思ひうんじけんといはれ給て、あまになり給〈37ウ〉はんとし給ふ、と朱雀院（マヽ、「こ」脱カ）きしめしたるか、と也。「うんじ」とハ、うしと思ひて也。
一、さりとて、又あらハれて女二の宮に夕ぎりちぎり給ハんハ、かる〳〵しからん、と朱雀院おぼしながら、はづかしくおぼさんとて、なにかわれさへきゝあつかハんとおぼして、此夕ぎりの事ハかけてもの給ハざりけり。
一、「大将も」とハ、夕ぎりも、とかくいひなしつるも、「いまハあひなし」とハ、曲なき、の心也。
一、「かの御心に」とハ、女二の宮の御心ゆるし給ハん事ハかたからん、宮す所の心しりなりけりと人にハしらせん、と夕ぎりおぼしなす也。
一、「なき人にすこしあさきとがハおほせて」とハ、御息所に心あさきとがハおほせて、いつありそめし事ぞともなくてまぎらハして、女二の宮にしるていひよらん、とおぼす也。「さらがへりて」とハ、あたらしくなりかへり、なみだをつくしてけさうだゝんも、うゐ〳〵しかるべし、（マヽ、「と」脱カ）思ひ給ふ也。
一、一条の宮に女二の宮わたり給はん日をさだめて、やまとのかミをめし〈38オ〉て、女二の宮むかへとり給ふべきことをの給ひあハせ給ふ也。「宮のうち」とハ、一条の宮すミあらし給たるを、はらひ、みす木丁のしつらひなどあらためさせ給へる也。「あるべきさほう」とハ、なに事もめでたくとゝのへ給ふ也。かやうのことも、やまとのかミにの給て、御屏風、御木丁までとゝのへ給ふ也。「かの家にて」とハ、やまとのかミのいへにて、せさせ給へる也。「その日、われも」とハ、夕ぎりも、一条の宮におハして、御くるま、御ぜんなどたてまつれ給へる也。
一、「宮ハ、さらにわたらじ」とハ、一条の宮にかへらじ、と女二の宮ハおぼしの給ふを、人〻もやまとのかミも聞て、わづらひてうちなげく也。
一、「さらにうけ給ハらじ」とハ、一条の宮へわたり給ふまじき、と女

二の宮の給ふ事、さらにうけ給ハるまじ。かなしき御ありさまを見奉りなげきて、此ほどのミやづかへハ、たふるしたがひてつかうまつりつ。いまハ、くにの〈38ウ〉あつかひをもし侍るべければ、まかりくだらん、と申也。「たふるにしたがひて」（マヽ、「に」脱カ）ハと、相当（さうたう）にしたがひて、と也。「宮のうちの事も」とハ、一条の宮の事も、たれにミゆづるべき人もなし。たい〳〵しく、思ひ侍るに、よろづを夕ぎりおぼしいとなむに、うちまかせ給へかし、と申す也。

一、「此かたにとりて」とハ、夕ぎりに契約（けいやく）し給ふ事ハ、かならずあるまじき事ながら、さこそハいにしへも御心にかなハねばこそ、かしは木にもちぎり給ひつれ。又、おとこふたりにみえ給ふためしもおほく侍る。女二の宮ひと所ハよのもどきをもおハせ給ふまじき、とおさなくおハします、とやまとのかミ申す也。たけうおぼすとも、女の心ひとつにて身をとりしたゝめて、身をかへりみて、やすくよをすぐし給ふべきやうハあらじ。人のあがめかしづき給ハんにたすけられ給てこそ、ふかき御心のかしこきをきても、人にかゝるべき物なりけれ、とやまとのかミの給ふ也。おとこにかゝりてこそ女〈39オ〉のかしこさはあらハし給ふべけれ、と也。「きミだちの」とハ、少将（せうしやう）のきミなどの、ことハり申しらせたてまつり給ハぬなり、とやまとのかミの給ふ也。

一、「さるまじき事も、御心どもに」とハ、いまいけんをも申給ハずハ、はじめより夕ぎりの御文とりつがでこそあらめ、とやまとのかミいひつゞけて、左近（さこん）と少将（せうしやう）のきミをせめければ、女房たちあつまりてきこえこしらふる也。「こしらふる」とハ、なぐさ（マヽ、「め」）奉る也。

一、「あざやかなる御ぞども」とハ、ぶくゑならぬ御ぞども、人〻女二の宮に奉りかへさするも、われにもあらず、おぼす也。「ひたぶるに」とハ、一かうにそぎすてまほしくおぼすかミを、かきいでゝ女二の宮見給へば、すこしたちほそりたれど、人ハかたわとも見たてまつらぬ也。ミづからの御心にハ、いミじくかミもおちそほりをとろへければ、人にミゆべきさまならず、とさま〴〵うき身をおぼして、又ふし給へる也。〈39ウ〉京（きやう）におハしつかん時たがふべし。よもふけぬべし、とみないひさハぐ也。

一、「のぼりにしミねのけぶりにたちまじりおもハぬかたになびかずもがな」、宮す所のけぶりに、われもたちまじり、夕ぎりになびかずもがな、と女二の宮よミ給へる也。

一、「御はさミなど」ゝは、あまにやならんとかミばさミおろしなどし給ひてハとて、はさミなどはとりかくしたる也。

一、「かくもてさハがざらんにてだに」とハ、かやうに人よりもてさハがれずとも、おしからぬ身ハ、あまにならんをさのミハたれかゆるさでハあるべき、わか〳〵しきやうにハしのびてハかミをはさミおろしなどハせん。人きゝも、をすまじかるべき、とおぼす也。「をすまじ」とハ、をそろしきやうならん、と也。「そのほいの事」とハ、かミそぎすつる事ハし給ハぬ也。

一、「くし、てばこ、からびつやうの物ども」とハ、京（きやう）へわれ〳〵のてうどゞも〈40オ〉はこびやりて、をの〳〵いそぎければ、ひとり女二の宮とまり給ふべきにもあらで、くるまにのり給ふも、かたハらのミまもられて、なき給ふ也。

一、「こちわたり給し時」とハ、をのへわたり給し時、宮す所よりかきつくろ（マヽ、「ひ」脱カ）などせられて、くるまよりおり給ひし事おぼしいづる也。「めもきりて」とハ、なミだにきりふたがりたる也。「御はかしに」とハ、まもりがたなにそへて、きやうばこを車に御かたハらはなたずのせたる也。

㈠、「戀しさのなぐさめがたきかたみにてなミだにくもる玉のはこかな」、宮す所の恋しさハかたみのはこをミて、たゞなミだもとゞまらざりける、と也。「くろきも」とハ、服（ぐく）の人ハ、なにたる物もみなく

ろくし給ふに、まだくろききやうばこしあへ給ハで、宮す所のてならし給へりしらでんのはこ也。「らでん」とハ、かいすりたる也。ずきやうにし給しを、かたみとてとり返し給たる也。「うらし〈40ウ〉まのこが心ち」とハ、一条のふる宮にかへり給たるハ、うらしまの子がふる里にかへりたる心ちす、とはこにつきて、女二の宮おもひいで給へる也。引哥、あけてだになにゝかハせんミづの江のうらしまが子をおもひやりつゝ。

一、「とのゝうちかなしげさもなく」とハ、一条の宮、人げおほくあらぬさまにみえたれば、車よせてもおりかねて、もとの御所ともおぼさぬ也。「うとましう」とハ、夕ぎりの心をそろし、と女二の宮おぼす也。「わか〳〵し」とハ、女二の宮をおさなくおハします、（マヽ、「と」脱カ）人〻見奉る也。

一、「との、ひんがしたいに」とハ、夕ぎりハ、ひんがしのたいに、御つぼねして、すミつきがほにおハする也。

一、「三条どのにハ」とは、くもゐのかりハ、にわかに夕ぎりあさましく心かハり給ふかな。いつのほどに女二の宮に思ひつき給けるか、と人〻も〈41オ〉をどろきける也。「なよゝかに」とハ、やハらかに、おもしろき事このましからず夕ぎりおぼす。おもひたればかやうに好色し給ひそめてハ心おさめ給ハぬ（マヽ）けると人〻おもへる也。「ゆくり（マヽ）なる」（「か」脱カ）ハ、うちつけなる心也。

一、「としへにける事」とハ、女二の宮にとしへて心かけ給し事を、けしきももらし給ハざりし事と思ひなして、女二の御（マヽ、「宮」脱）心ゆるし給ハぬ。思ひよる人もなきぞいたハしき、とてもかくても女二の宮御ためをぞあさくをしはかりける。

一、「御まうけ」とハ、一条の宮に女二の宮かへり給へるまうけ、さうじん物なるを、夕ぎりもおハしましたるはじめにゆゝしけれど、一こんまいらせ給へるなり。女二の宮まだ服なれば、さうじん物なる也。

一、「みなしづまりぬる」とハ、人〻しづまりたるに、夕ぎりわたり給て、女二の宮にたいめんし給ハん、と少将のきミせめ給ふ也。〈41ウ〉

一、「御心ざし」とハ、まことに女二の宮に御真実ならば、けふあす過してきこえ給へ。こゝにかへりて、なき人のやうにおぼししづミて、こしらへきこゆるも、つらしとおぼす、といへる也。「こしらへ」ハ、なぐさめいへるも也。

一、「なに事も身のためこそ」とは、少将のきミ、わが身のためをこそおもへ。女二の宮の御心にたがひてハいかゞ、といへる也。

一、「をしはかりしにたがひて」とハ、女二の宮の御心おもひやりしにたがひて、心えがたき御思案、と夕霧の給ふ也。「人の御ため」とハ、女二の宮の御ためも、わがためも、よのもどきあるまじきやうにとおもふ、との給ふ也。

一、「たゞいたづら人」とハ、しゐて夕霧の給ハゞ、女二の宮もなくなり給ハん、と少将のきミいへる也。よろづ夕霧の給へる事を、思ひわかぬ、と也。

一、あがきミ、をしたちて、ひたぶる心ハ夕霧をしつけて一向にことハり〈42オ〉しらぬ事なの給ひそ、と也。「あがきミ」ハ、わがきミ也。

一、「にくゝめざまし」とハ、女二の宮など、われをにくゝめざましと、人よりまさりておぼさるゝぞ。またかく人ににくまれてもしらぬと、夕ぎり人にもことハらせん、との給ふ也。

一、「ことハりハ、いづかたにかよる人」とハ、此ことハりを、人にいはせば、女二の宮の御道理とこそいふ人あらめ、と少将のきミ又いひ返す也。

一、「いまハせかれ給ふべきならねば」とハ、せきとむる人なければ、此少将のきミをひきたてゝ、みちしるべして、おくに夕霧入給へる

也。

一、女二の宮ハ、なさけなくあハつけき夕ぎりの心なりとおぼして、ぬりごめにおましひとつしかせて、おほとのごもれる也。「ぬりごめ」とハ、四方かべぬりこめて、とりもてつかひ給ふてうどをかるゝ所也。「あハつけき」とハ、かるゞしき、といへることば也。「おましし」とハ、むしろしかせて也。〈42ウ〉

一、「これもいつまで」とハ、かくこもりゐるべき事もいつまでならん。かくばかり夕ぎりも女房たちも、みだれたちたる人の心どもなれば、いかやうにかとりなさるべきと、くちをしく女二の宮おぼす也。

一、「おとこぎミ」とハ、夕ぎりは、つらしとおぼせど、なにかさのミハ女二の宮もてはなれ給ふべきと、よもすがら思ひあかして、山どりの心ちし給也。引哥、

一、ひるハきてよるハわかるゝ山鳥のかげみる時ぞねはなかれける。

山鳥ハ、よるはめんどり、おんどり一所にねぬといへり。「ことゝいへば」とハ、れいの事といへば、つれなくおハします、と也。「ひたおもて」とハ、いひわびて人にもさだかにかほをみえんもはづかしければ、夜ふかくいで給ふ也。「ひたおもて」とハ、直面とかける也。すぐがほみらるゝ事也。「いさゝかのひま」とハ、すこしぬりご戸あけ給へ、の心也。

一、「うらみわびむねあきがたき冬のよに又さしまさるせきの岩かど」、〈43オ〉ぬりごめの戸のあきがたきを、むねのかたきにもたせてよめる。又、あふさかによそへて、また女二の宮にあひミ奉らぬ心をいへる也。「いはかど」ハ、岩の門のやうなるあハひをいへる也。

一、「ひんがしのうへ」とハ、花ちる里のかたに、夕ぎりおハしければ、一条の宮わたし給へる事、かの内府のあたりなどに、そのさたあるときゝたるハ、いかゞある事ぞ、と花ちる里とひ給ふ也。ミ木丁へだてゝおハしませ、と花ちる里夕ぎりにハほのみえ給へる也。

一、さやうにも、人いひなしつべき事也。こ宮す所のかぎりのおりに、又ミゆづる人なきを、のちのうしろにとの給ひをきしかバ、又もとよりの心ざしもありし事にて、かく一条の宮にわたし奉りたる也。さまゞに、いかに人あつかひ侍るらん。さもあるまじき事も、人こそ物いひさがなき物にハあれ、と打わらひつゝの給ふ也。〈43ウ〉

一、「かのさうじミ」とハ、女二の宮、よにへじと思ひたち給ふて、あまにならん、とし給ふ。「こなたかなた」とハ、女三の宮のあまになり給たるに、又、女二の宮さへあまになり給はんハ、きゝぐるしかるべきとてあつかひ侍る、と夕霧の給ふ也。「よにへじ」とハ、おとこもたじ、の心也。「けんぎ」とハ、うたがひはなれても、又、宮す所のゆいごんをたがへじとおもふ、との給ふ也。

一、「院のわたらせ給へらん」とハ、源氏わたり給ハゞ、かやうにかたらせ給へと、花ちる里に夕ぎりの給ふ也。ありゝてけさう心つかふとおぼすらんと、はゞかり侍れど、かやうのすぢにてこそ、人のいさめも、ミづからの心にもしたがハぬ物なれ、との給ふ也。

一、人のいつハりをいふかと思ひつれば、まことに女二の宮わたし給へる事、と花ちる里の給ひて、「三条のひめぎミの」とハ、くもゐのかりの、おぼさん事こそいとをしけれ、との給へば、らうたげにひめぎミとの給へど、〈44オ〉おにしう侍るさがな物と、くもゐのかりの事を夕ぎりの給ふ也。「おにしう」とハ、鬼のやうなる、と也。「さがなさ」ハ、いぢわろき也。

一、「それもをろかにハ」とハ、くもゐのかりをもをろかにハもてなさじ、と也。「御ありさまども」とハ、花ちる里の御心にて、をしはかり給へ。なだらかにもてなし給ふこそつゐのたのもしき事にハ侍れ、と也。「なだらか」とハ、やハらかなるがたのもしき、と也。「ことがましき」とハ、くぜちがましきハ、しバしハむつかしさにはゞか

りて、かんにんすれども、つゐにハをんなにしたがひはてぬ物なれば、事のみだれいできぬるのちハ、女もおとこもにくげなる事ありて、あきたらしき事かならずいできくる、と也。「あきたし」ハ、あきたらしき也。

一、「みなミのおとゞ」ハ、むらさきのうへの、御心などこそ、ありがたき事、と也。「此御かた」とハ、花ちる里の御心などこそめでたけれ、との給ふ也。〈44ウ〉

一、「物のためしにひき給ふ」とハ、夕ぎり、貞女のためしにひき給ふに、身のおぼえのはかゞ〳〵しからぬ事こそあらハれめ、と花ちる里の給ふ也。

一、「ミづからの御くせをば」とハ、源氏の好色のくせを、人のしらぬやうに、夕ぎりのいさゝかのあだゞ〳〵しさをも、大事とおぼして、いましめ給ふハ、さかしだつ人の、わが身のうへしらぬやうなる、と花ちる里の給ふ也。「かしだつ」とハ、賢人の身のうへしらぬといふやうなる、と也。

一、「さなん、つねに此ミち」とハ、源氏の好色のミち、つねにいましめの給ふ。源氏のかしこきをしへならでも、いとよくおさめて侍る心を、と夕霧の給ふ也。

一、「おまへまいり給へれば」とハ、源氏のおまへに夕霧まいり給へば、「かの事ハきこしめしたれど」ゝハ、一条の宮わたし給へるとハきこしめしたれど、何かハきゝがほならんおぼして、たゞうちまもり給へるに、夕霧きよらに、みえ給へば、すきゞ〳〵しき事し給ふとも、人のもどくべきさまならずと〈45オ〉鬼かミもつミゆるしつべく、あざやにほひをちらしてみえ給ふ。物思ひしらぬわか人にもあらず。かたわなる所なき、と夕霧を源氏見給ふ也。女にてハ、などかめでざらん、かゞみを見ても、夕霧心おごりなどかせざらん、と御子ながらも、源氏御らんずる也。

一、とのに夕ぎりわたり給へば、わかぎミたち、すぎ〳〵まつハれあそび給ふ也。「すぎ〳〵」ハ、つぎ〳〵うつくしくおひいで給へる也。

一、「をんなぎミハ」とは、くもゐのかりハ、ミ丁のうちにふし給へり。夕ぎりいり給へど、めも見あハせ給ハず。つらくおぼすらん、と見給へど、はゞかりもなくもてなして、御ぞひきやり給へば、いづことておハしつるぞ。丸ハはやうしにき。つねに鬼との給へば、おなじくはおにゝなりはてん、との給ふ也。「御心こそ」とハ、くもゐのかりの心こそ、「おによりもけにおハすれ」とは、おによりも心こそをそろしくおハしませ、と夕霧の給ふ也。「さまは〈45ウ〉にくげなき」とハ、くもゐのかりのありさまハにくからねば、えうとみはつまじき、との給ふ也。「心やましうて」とハ、くもゐの心くるしくおぼして、夕ぎりめでたきさまになまめき給ふあたりにありふべき身にもあらねば、いづちも〳〵うせなん。あひなくとしへたるくやしき、との給ふ也。「なまめひ給ふ」とハ、うつくしき事このミ給ふ、の心也。「あひなく」とは、あぢきなく也。

一、「さまハ、あひぎやうづき」とハ、くもゐのかり、おきあがり給たるさまは、あい〳〵しく、にほひやかなるかほざまなる、と也。かくおさなげにはらだちなし給へば、此おにこそをそろしくもなけれ、と夕ぎりの給ふ也。「かうゞ〳〵しきけをそへばや」とハ、をにゝかミゞ〳〵しきけはひそへて、やハらげたき、と夕ぎりの給ふ也。

一、なに事いふぞ。おいらかにしに給へ。丸もしなん。見れバにくし、きけバ〈46オ〉ば、あいぎやうなし、との給ふ也。「おいらかに」とは、真実に、といふことば也。

一、ちかくてこそ見給ハずとも、よそにハきゝ給へ、と「ちぎりふかきせ」と、三途川にてハ、夫婦てをひきわたすといへば、此しるしミせんとて一たびにしなんとくもゐのかりの給ふか、と夕ぎりの給

ふ也。「うちつゞくべきよミぢのいそぎ」とハ、「よミぢ」とハ、めいどにゆくみち也。「さこそハちぎり聞えし」とハ、のちのよもおなじはちすとちぎりたる、と也。「なにくれとこしらへ」とハ、なにやかやとなぐさめの給ふ也。

一、「心うつくしう」とハ、くもゐのかり、心よくおハする人なれば、なをざり事とはみ給ながら、をのづからなごの（マヽ、衍字カ）ミつゝ物し給へる也。「なごミ」とは、やハらぎ給ふ也。「なをざり事」とハ、大かたなる事とハおぼしながら也。

一、「心はそらにて」とは、夕霧、くもゐのかりもあハれとハおぼせど、心ハ空に、女二の宮の御かたにゆかん、とおぼす也。「かれも、わが心をたて〈46ウ〉て」とハ、女二の宮も、つよく物〳〵しき心ハみえ給ハねど、人ぎゝをおぼして、もしあまになり給ハゞ、おこがましうあるべきなどゝおぼして、とだえなくかよひミ奉らん、とおぼす也。「ほいならぬ」ハ、本意ならぬ也。

一、「けふも御かへりなき」とハ、女二の宮の御かへりけふもなきを、心にかゝりて夕ぎりながめわび給へる也。

一、「きのふけふ露ばかりまいらざりける物」とハ、くもゐのかり、まいらざりし物など、いさゝかまいりなどしておハする也。

一、「むかしより、御ために」とハ、くもゐのかりのために心ざしを（マヽ、「か」脱）ろならざりし事かたり給ふ。内府のつらくもてなし給へりしに、しれがましき名をとりつれど、たへがたかりしねんじてこそ、本意をとげつれ、と夕ぎりの給ふ也。「しれがましき」ハ、をろかなりし名をながしたる、と也。

一、「こゝかしこすゝみ」とハ、中務の宮、左大臣などのむこにとり給ハんと〈47オ〉の給しも、きゝすぐして、くもゐのかりにつゐにほいをとげたる、と也。

一、「女だに」とハ、わが心のやうなる貞女あるまじき、と夕ぎりの給ふ也。両夫にみえずといへども、女さへわがやうに一すぢにさだまりたる心あらじ、と也。

一、「いまおもふにも」とハ、いかでくもゐのかりを一すぢにおもひかけつらんと、夕ぎりわが心ながら、いにしへだにおも〳〵しかりし、との給ふ也。いまハ、くもゐのかりわれをにくミ給ふとも、おぼしすつまじき君だち、所せくかずそひ給へば、心ひとつにもてはなれ給ふとも、はなれがたからん、と也。「又、見給へ。いのちこそさだめがたけれど」、引哥、えぞしらぬいま心みよいのちあらば人やわするゝわれやとハぬと。

一、「をんなも、むかしの事」とハ、くもゐのかりも、おもひいで給ふことおほく、あハれにもありがたかりしちぎりのふかゝりけるかな、とおぼししり給ふ也。

一、「なよびたる御ぞ」とは、なへたる御ぞ「ぬひ給て」とハ、ぬぎをきて、心こと〈47ウ〉なるをとりかさね、たきしめ、つくろひて、いで給ふを、くもゐのかり、ほかげにみいだし給ふて、しのびがたくて夕ぎりのぬぎ給たるひとへの袖をひきよせて、よミ給ふ。「しのびがたく」ハ、たへがたく也。「ほかげ」ハ、ともし火のかげ也。

一、「なるゝ身をうらむるよりもまつしまのあまのころもにたちやかへまし」、ころもになるゝ夕ぎりをうらむるよりハ、わがあまにならん、とくもゐのかりよミ給ふ也。松嶋やをじまがさきにあさりするあまの袖だにかくはぬれしを。「うつし人」とハ、つねの女にてハ、すぐすまじ。あまにならん、と也。引哥、

一、（マヽ、）かひすらもいもせハありといふ物をうつし人にてわがひとりぬる。「うつし人」とハ、現在の人といへる心也。

一、「たちとまりて」とハ、くもゐのかりのうたを、夕ぎりきゝ給て、返しよミ給ふ也。

一、「まつしまのあまのぬれぎぬなれぬとてぬぎかへつてふ名をたゝめ

やは」、くもゐのかり、あまになり給ふとも、わがやどをたちいで給へる名ハたち〈48オ〉給はん、と也。「うちいそぎて、なを〳〵し」とハ、なをしき人のやうにいそぎいで給ふ夕ぎりのありさまかる〴〵しき、と也。

一、「かしこにハ」とは、一条の宮にハ、ぬりごめの戸をさしこもり給へる也。

一、「わか〳〵しうけしからぬ」とハ、あまりとぢこもりてゐ給へるも、けしからず人申なすべし。つねのおましにいで給て、あるべき事を夕ぎりにことハりきこえさせ給へ、と人〻申せば、さもある事とハ、女二の宮おぼせど、よそのきこえも、「過にしかたの事も」とハ、宮す所のなくなり給しも、夕ぎりのおりふし一よとゞまり給しゆへに、なげきまどひ給て宮す所かくなり給へるとおぼしあつむれば、うらめしき人のゆかりと夕ぎりをおぼす也。「ゆかり」とハ、ゆへといふ心也。夕霧ゆへ、と也。

一、「めづらかなり」とは、あまりつれなく女二宮たいめんし給ハぬハ、めづらしき心、と也。

一、「いさゝかも人心ち」とハ、本心の人心ちせんおりあらん時に、夕ぎりもそれ〈48ウ〉までわすれ給ハずハ、たいめんせん、との給ふ也。「此御ぶくのほど」ゝハ、ミやす所の服のあひだハ、一すぢにこと事思ひみだれずすぐさん、との給ふ也。

一、「あやにくに」とハ、にくしといへば、しらぬ人なく女二の宮に心かけたてまつれるとよにしらせ給ふ夕ぎりの心ばへつらきとおぼさるゝ、と人〻きこゆ。

一、おもふ心ハ、又ことざまにうしろやすき、とわが心あてハ又別に、よのきこえわろからぬやうにおもふ物をおもハずおぼしなすこそつらけれ、と夕ぎりなげき給ふ也。れいのやうにて女二の宮おハしまさば、物ごしにてきこえん、御心やぶるべきにもあらず。あまたのとし月も、心とけ給ふべきまでハまちたてまつらん、との給ふ也。

一、「かゝるみだれにそへて」とハ、御息所を思ひみだれ給ふにそへて、夕ぎりのかよひ給ふと人のきゝつたへん事なのめならず、心うき心がまへと、又いひかへし給ふ也。「なのめならず」ハ、大かたならず也。〈49オ〉

一、「さりとてかくてのミやハ」とは、かくたハぶれのやうにいひなしてハ、人ぎゝもはしたなう、こゝの人めもくちをしと思ひ給へば、うち〳〵の御心づかひ、の給ふさまにしたがひて、しバしハなさけつくらん。よづかぬありさまハ、いとうたてあり。又かくつれなくおハしますとて、かきたえまいらずハ、女二の宮の御名も、いかゞくだし給ハでハあるべき。ひとへにおさなくおハしますこそいとほしけれ、と此少将のきミを夕ぎりせめ給へば、少将のきミ、げにことハりとも思ひ、夕ぎりの御ありさまかたじけなうおぼゆれば、人かよハし給ふぬりごめきたのくちよりいれたてまつりたる也。あさましうつらしと、人〻をも女二の宮うらみ給ふ也。

一、「かゝるよの」とハ、みないやしき女房どもの心なれば、これよりまさるうきめもミせつべきと、たのもしき人もなく、かなしとおぼす也。

一、「おとこぎミハ」とは、夕ぎりハ、おぼしめししるべきことハりを申しらせ〈49ウ〉奉り給ひ、あハれにもおかしうも申つくし給へど、女二の宮ハつらく心づきなしとのミおぼさるゝ也。

一、かう、いはんかたなき物におぼされける身こそ、はづかしけれ、と夕霧の給ふ也。

一、「あるまじき心のつきそめけんも」とハ、女二の宮におほけなく心かけたてまつりしも、くやしうおぼし侍れど、とりかへされぬ物なれば、いかゞせん、と夕ぎりの給ふ也。又われをいとハせ給ふて、つれなくおハしましても、なにほどのたけき御名にかあらん。おぼ

しよハれかし、との給ふ也。

一、おもふにかなハぬ時、身をなぐるためしもあれば、わがかく心かけたてまつるを、ふかきふちになずらへて、御身をなげさせ給たるとおぼしなして、身をすてゝなびかせ給へかし、などゝ夕霧の給ふ也。

一、「ひとへの御ぞを御ぐしごめに」とハ、あハせにかミひきくゝみて、「たけき事」とハ、ねをのミなき給ふよりほかの事なき也。〈50オ〉

一、いみじうおもふ人も、にくしと人をおもふ人も、かばかりいひよりぬれば、をのづからゆるふ心もある物を、いは木よりけになびきがたき、ちぎりとをくて、にくしなどおもふやうあるを、さやおぼすらん、との給ふ也。「岩木に」、引、人非ニ木石一、皆有レ情。不レ如レ不レ合ニ傾城色一。

一、「あまりになれば、心うく」とハ、くもゐのかりのおもふ給ふらん事、いにしへも、なに心なく、あひ思ひかハし給たりしよの事、いまハとくもゐのかりもうちたのミ給たるに、わが心もて、あぢなく（マヽ、「き」脱）物おもハせ給ふ事などおぼしつゞけ給ふに、「あながちにもこしらへ給ハぬ」とハ、女二の宮のつれなきに、夕ぎり退屈し給て、しゐてもいひなぐさめ給ハぬ也。

一、「かうのミしれがましく」ハ、をろかにざれがましくて、いでいらんよりはとて、けふハ夕ぎりとまり給ておハするを、あさましうひたぶるなるを、女二の宮は、いよ〳〵うとミ給ふ御けしきまさり給ふを、おこがましとおぼす也。〈50ウ〉

一、「かうのからびつ」とハ、さま〴〵の香いれ給ふからびつ也。「ミづし」ハ、たな也。けぢかうしつらひて、夕ぎりぬりごめのうちおハする也。ぬりごめうちくらけれど、あさ日さしいりて、人のけハひミゆるに、女二の宮のうづもれたる御ぞひきやり、みだれたる御ぐしかきやりなどして、ほのみたてまつり給ふに、あてに女しう、なまめきたるけハひ也。「なまめきたる」は、うつくしきかたち也。「おとこの」とハ、夕霧の、御さまハ、「うるハしだち」とハ、花麗にひきつくろひ給たるよりも、うちとけすがた、きよげになる也。

一、「こぎミのことなる事なかりし」とハ、かしハ木のことにかたちすぐれたる所なかりしだに、女二の宮をかたちまほにもおハせずと、おもへりしとおぼしいづるに、まして、かうをとろへにたるを、しバしにても、夕霧見しのびなんや、とはづかしうおぼす也。「しのびてん」とハ、かんにんせし、と也。

一、「とざまかうざまに」とハ、夕ぎりになびくべきかと思ひめぐらし給へど、〈51オ〉たゞかたハらいたく、内府も又ハ朱雀院なども、きゝおぼされん事のつミさらんかたなきに、おりさへはゝ宮す所のぶくのうちなれば、なぐさめがたくおぼさるゝ也。

一、「御かゆなど、れいのおましに」とハ、夕ぎりに御かゆなどまいらせんとて、つねのおましにいれたてまつりたる也。「いろことなる」とハ、服衣にて、みす木丁までにびなれば、いま〳〵しきやうなるとて、ひんがしおもてに屏風をたてゝ、もやのきハにかうぞめのミ木丁など、ことぐ〳〵しからぬをたてゝ、ぢんのにかいなどやうのをたてゝ、しつらひたる也。やまとのかミのとりつくろふ也。「ぢんのにかい」ハ、沈香などをかるゝたな也。「人〻も」とハ、女房たちも、あざやかならぬ色の、やまぶき、かひねり、こききぬ、あをにびなどをきかへさせたる也。「やまぶき」ハ、おもてうすくちば、うらこうばゐ也。「かひねり」ハ、〈51ウ〉うすくれなゐのねりぎぬ也。「あをにび」ハ、花田に、あをけ入たるいろ也。「こきゝぬ」ハ、むらさきのこき也。「うす色のも」ハ、うすむらさのも（マヽ、「き」脱）、からぎぬ也。あをくちなどきかへさせたる也。「あをくちば」ハ、くちばにあをけ（マヽ、「ば」脱）入たる色也。

一、「をんな所にて」とハ、よろづを女のはからひ宮といへる心也。「あ

りさま心とゞめて」とハ、しどけなくならひたりしを、やまとのかミ心とゞめて、わづかなるしも人どもいひとゝのへ、やまとのかミひとりあつかふ也。

一、「やんごとなきまらうど」ゝは、夕霧のおハしますとて、「もとつとめざりけるけいしども」とハ、ちかきころ事をこたりける女二の宮の家つかさども、まいりて、まん所などにゐて、よろづの事いとなむ也。「まん所」とハ、よろづのことをこなふ所也。政所と書也。

一、「せめてすミなれがほ」とハ、夕ぎり、一条の宮をわが御所のやうにすミな〈52オ〉なれ給へば、「三条どの」とハ、くもゐのかりハ、さしもやハ、さもあらじと思ひたれば、かく夕ぎり心かハり給たるとて、なげき給ふ也。「まめ人の心かハる」とハ、実めやかなる人の心かハるハ、なごりなくなるときゝたるハまことなりとおぼして、いかさまにして、此夕ぎりのなめげさをみじとおぼして、内府のかたへかたたがへにとてわたり給へる也。「なめげさ」とハ、無礼なるさま也。夕ぎりのわれにはゞかりをき給ハぬ、とくもゐのかりおぼす也。

一、「女御の」とハ、こうきでんの、里におハするなどにたいめんし給て、すこしなぐさめにおぼして、れいのやうにいそぎてもかへり給ハぬ也。

一、「大将も」とハ、夕ぎり、きゝ給て、「きうに物し給ふ本上」とハ、くもゐのかり短慮におハするに、内府はた、おとな〳〵しからずのどめたる所おハしまさぬ人ゝにて、花やかにひききりにて、わがあたり、みじ、きかじなど、内府の給ひて、くもゐのひが〳〵しくよびとりやし給ひつらんと〈52ウ〉をどろきて、三条どのかへり給たる也。「ひきゝり」とハ、いとなどひきゝるやう物をきうにあつかふ心也。

一、「きんだちかたへハ」とハ、過半ハとゞめをきて、ひめぎミ、さてハおさなきちごをぞくもゐのゐておハしける也。「ゐて」ハ、つれて也。

一、「ミつけて」とハ、御所にのこしをかれしきんだち、夕ぎりをミつけ給て、よろこびむつれ、あるハくもゐのかりをこひ給てなき給ふを、心ぐるしく夕ぎりおぼす也。

一、「御せうそこ」とハ、くもゐのかりへ御文まいらせられ、御むかへ奉り給へども御かへりだになし。かたくなしうかる〳〵しのよや、と夕ぎりおぼす也。

一、「おとゞの」とハ、内府の、きゝミ給ハん事もありとて、日くらしてミづからまうで給へり。くもゐのかりハ、しんでんにおハするとて、れいおハするつぼねにハ、女ばうたちばかり、わかぎミたちにそひてゐたりける。〈53オ〉

一、いまさらにわか〳〵しの御まじらひや、かゝる人を、こゝかしこにおとしをき給て、ふさハしからぬ御心のすぢとハとしごろみしりたれど、など夕ぎりの給ふ也。「ふさハしからず」ハ、よからず也。不祥とかく也。

一、「むかしより心にはなれず」とハ、くもゐのかりより、内府のひきはなち給ひつれど、われハ心にはなれず、くもゐのかりかたく思ひて、かくきんだちなどあまたになりたるを、かたミに見すてはぐゝみ給はんとこそたのミたるに、はかなき一ふしに、かくハもてなし給ふべきかハと、あはめうらみ給ふ也。「あはめ」、はぢしめ也。

一、なき事も、いまハと見あき給たれば、いま、はた、なをるべきにもあらぬを、「あやしき人ゝ」とハ、いやしき子どもたちハ、おぼしすてずハ、うれしうこそあらめ、とくもゐのかりの給ふ也。

一、なだらかの御いらへや。いひもていけば、「たが名かおしき」、引哥、〈54オ〉

一（マヽ）、いひいでばたがなかおしきしなのなるきそぢのはしのかけしたえずは。くもゐのかりの名がたゝん、わがながたゝん、と夕ぎりの給ふ也。しゐてかへり給へとも夕霧の給ハで、その夜ハひとりねし給へる也。「あやしうなかぞらなる」とハ、くもゐのかりも、うけとけ給ハず。女二の宮も、つれなくおハしますと思ひつゞけて、きんだちをまへにふせてふし給へる也。「かしこにハ、又いかに」とハ、女二の宮おぼしみだるらんと思ひやり給て、やすからずおぼす也。「いかなる人、かやうなる」とハ、好色のみちを、いかなる人、おかしくおもふらんと、物ごりしぬべく、夕ぎりおぼす也。

一、人〻の見きかんもわか〳〵しきやうにとて、かぎりとの給ひはてば、さて心ミん。三条どのなる子どもたちも、はゝぎミをこひなくを、えりのこし給へるやうあらんとハみながら、すてがたければ、ともかくもはぐゝまん、とおどしきこえ給へば、すが〳〵しき心にて、くもゐのかり、此〈54オ〉きんだちさへや、一条の宮に夕ぎりゐてわたし給はん、とあやうし。「ひめぎミを、いざ、給へかし」とハ、三条どのに、と夕ぎりひめぎミいざなひ給ふ也。見奉りにかくまいりくる事もはしたなければ、つねにハまいりこじ、との給ふ也。「かしこにも」とハ、三条の御所にも、きんだちのこりておハすれば、おなじ所にてみたてまつらん、との給ふ。ひめぎミ、まだいとおさなきをあハれと見給ふ也。「はゝぎミの御をしへ」とハ、くもゐのかりのをしへに、なかなひ給ひそ。心うく、思ひとるかたなき心あるハ、あしきわざなり、といひしらせ給ふて、よふかくかへり給ふ也。

一、「おとゞ、かゝる事をきゝ給て」とハ、内府きゝ給て、人わらハれなるやうに、くもゐのかりの事おぼしなげく也。しバしハさても夕ぎりの心ミ給ハで。をのづからおぼす所もあるらん物を。女〈54ウ〉のかくひきゝりなる思案も、かへりてかる〴〵しき、と内侍くもゐのかりをいさめ給ふ也。「かくいひそめつ」とハ、かやううらみをいひそめ給て、やがておれてふとかへり給ハんも、人めあしかるべし。をのづから夕ぎりの心ばへハみえなん、と内府の給ふ也。

一、「かの宮に」とハ、女二の宮に、蔵人少将のきミして、内府の給ふ也。

一、「ちぎりあれやきミに心をとゞめをきてあハれと思ふうらめしときく」。かしは木のきたのかたにてわたり給し時ハ、あハれと思ひ、いま又夕ぎりにちぎり給ふときけば、うらめしき、と也。「えおぼしはなたじ」とハ、夕ぎりわがむこなれば、女二の宮又おぼしはなたじ、と内府の給ふ也。「少将もておハして」とハ、内府の御文、一条の宮にもておハしたれバ、みなミおもてのすのこにわらうださしいでゝ、「人〻物きこえにくし」とハ、女ばうたちあへしらひにくゝおもふ也。「わらうだ」ハ、ゐゐんざ也。〈55オ〉

一、「宮ハまして」とハ、女二の宮ハ、ましてわびしくおぼしなげく也。

一、「此きミハ、中に」とハ、少将の君ハ、内府の御息の中にかたちよきさまにて、こゝかしこ見まハし給て、かしは木の事を思ひいでがほにて、まいりなれたる心ちして、うゐ〳〵しからぬ、との給ふ也。「うゐ〳〵し」と、（マヽ「八」脱）はじめてまいりたるともおもハぬ、と也。「さも御らんじ」とハ、かしは木のすミ給し時、なれ〳〵しくまいりたるとハ見ゆるし給ハぬか、と少将の給ふ也。

一、「御かへりきこえにくゝ」とハ、女二の宮、御返哥あそバしにくゝて、われはえかくまじ、との給へば、人〻、御心ざしもへだゝりたるやうに。せんじがきハあしく侍らん、とみな申す也。「せんがじき」（マヽ「じか」）とハ、右筆がき也。

一、まづ女二の宮うちなき給て、宮す所おハせば、心づきなくおぼしながらも、わがつミをかくしてかへしよミ給ふべき、とつらきなミ

ださきだちつゝ、えかきやり給ハぬ也。〈55ウ〉

一、「なにゆへかよにかずならぬ身ひとつをうしとも思ひかなしともきく」、なにゝかゝるうき身ひとつを、うらめしかなしと、きゝあつかひ給ふらん、と也。たゞ心に女二の宮おぼしけるまゝ、と也。「少将ハ、人〻」とハ、蔵人のきミハ、人〻に物がたりして、時〻まいるに、みすのまへのあへしらひハ、たづきなき心ちしけるを、いまよりハよすがある心ちして、つねにまいるべし、と夕ぎりに女二の宮ちぎり給ふを、ねたましげにの給ふ也。「たづき」ハ、たより也。「よすが」も、たよりある、の心也。「ないげゆるされぬべき」とハ、うちほかのへだてなく、としごろかしハ木のきたのかたにておハせししるしあらハれたる、などゝ少将の給ふ也。

一、「いとゞ心よからぬけしき」とハ、女二の宮、心よからずいとゞおぼさるゝに、夕霧あくがれまどひ給ふほどに、くもゐのかりは、日ごろふるまで、をとづれ給ハねば、夕ぎりをうらみなげき給ふ事しげし。

一、「内侍のすけ」とハ、藤内侍のすけ、かゝる事をきゝて、われをくもゐのかり〈56オ〉ゆるさず、ねたミ給しに、かくあなづりにくき事のいできたるを、いかゞおぼすらん、と思ひて、文など時〻くもゐのかりにハ奉れバ、かく聞えけり。

一、「かずならば身にしられましよのうさを人のためにもぬらす袖かな」、われも人かずならば、女二の宮ねたましかるべきを、くもゐのかりの御なげき思ひやりきこゆるにも、袖ぬるゝ、と也。

一、「なまけやけし」とハ、はゞかりなくも、いへるかな、とくもゐのかり御らんじけれど、内侍のすけもすこしハねたましく女二の宮おもふらんとおぼすかた心ぞつきける、と也。「かた心」ハ、一かたの心にハ藤内侍のうへをもおぼす也。

一、「人のよのうきをあハれとみしかども身かへんとハおもハざりしを」、藤内侍のすけの、うへのあハれを思ひやりしに、いまわが身のうへにかゝる物思ひのかハりこんとハおもハざりし、とくもゐのかりよミ給ふ也。

一、「おぼしけるまゝ」とは、くもゐのかり、うちおぼしけるまゝの心と、内侍のすけ〈56ウ〉みける也。「むかしの中だえ」とハ、くもゐのかりのとだえの時分ハ、此内侍をぞ、夕ぎりかしづき給し、と也。「あらためてのち」とハ、くもゐのかりにさだまり給てのちこそ、玉さかに夕ぎりなり給たれ、と也。「きんだちハあまた」とハ、藤内侍のすけのはらに、あまたの御子いできたる也。

一、「此宮ら〈御はらカ〉」とハ、くもゐのかりばらハ、太郎君、三郎ぎミ、五郎ぎミ、六郎君、大君、中の君、四のきミ、五の君とおハす。藤内侍ばらハ、三のきミ、六の君、次郎ぎミ、四郎ぎミとぞおハしける。十二人が中に、かたほなるなき、と也。

一、三のきミ、次郎ぎミハ、花ちる里の猶子にし給へる也。

一、「院もみなれ」とハ、源氏も、らうたがり給ふ也。「此御中らひ」とハ、女二の宮、くもゐのかり、夕ぎりの御中の事、いひやるかたなき、と記者也。〈57オ〉

（日本中古文学）